

メルヒエンと宗教教育（1）

佐々木 勝彦

I アンデルセンの「童話」に表れた宗教意識

はじめに

・「アンデルセンの「童話」に表れた宗教意識」というテーマは、「童話」をキリスト教教育の教材として用いる可能性について論ずるなかで生まれました。例えば、「みにくいあひるの子」という作品を教材として用いる場合、当然、作品それ自体の分析と、それを読んだり聞いたりする対象学年の絞り込みが問題になります。もしもその対象が幼稚園児でなく、中学生だったらどうなるでしょうか。おそらくかなりの戸惑いと、「いまさら、なぜ子どもの本を取り上げなければならないのか？」という反発の声が上がるでしょう。

小学生から中学生になると、その時間意識は大きく変化します。時制の違い、つまり過去、現在、未来の区別がより明確になり、高校生になると、その時間意識と空間意識はさらに広がり、地球の起源を考えたとき、地球の裏側をより具体的にイメージしたりすることができるようになります。だからこそ、「いまさらなぜ、子どものための「童話」を読まなければならないのか？」という問いがでてくるのです。

では、「童話」を教材とすることは無意味なのでしょうか。もしもそれが『星の王子様』のような大人の童話であつたなら、絶対反対という声は小さくなるはずですが。アンデルセンにも『絵のない絵本』という作品があります。それは小説に分類されることもあれば、童話に分類されることもありませう。

アンデルセンは「童話の王様」と言われてきましたが、彼が用

いる「童話」という語には、わたしたちの常識よりも少し広い意味内容が込められています。この語について、安藤忠夫著『アンデルセン』（清水書院）はこう説明しています。「童話集の表題に用いられている「童話」(Eventyr、エーヴエンテユア)ということばは、日本語の「童話」「おとぎばなし」、英語の「妖精物語」(Fairy Tales)、ドイツ語の「メルヒェン」といったことばとは、かなりニュアンスが異なり、英語の「アドヴェンチャー」とおなじで、ラテン語の (res) aventura から来ている。これは騎士が遍歴中に「《でくわした》(出来事)」を意味し、もとの動詞 *advenire* は「来合せる、起こる」の意味である。やがてフランス語 (*aventure*) では恋も含めた冒険全体をあらわすようになり、デマーク語では「冒険(談)、おとぎ話、物語」を意味する」(八九頁)。したがってアンデルセンの童話は「子どものために語られた話」であるだけでなく、「大人のための童話」でもある可能性が高いということになります。

以上のことを念頭に置きつつ作品を分析するならば、その作品の新たな側面が見えてくるかもしれません。つまり、中高生のような、時間意識や空間意識が広がりつつある対象を前提に、「童話」を「教材」として用いる可能性が出てきます。

・「童話」を用いる際に、作品の分析、対象の絞り込みが大切

であることは言うまでもありませんが、その作者の問題はどうなるでしょうか。例えば「グリム童話」の場合であれば、その作品は、収集した素材を編集したものにすぎず、グリム兄弟が創作したわけではありません。したがってそこで問題が生ずるとすれば、それは、編集過程において、元来の素材に手が加えられたような場合です。そのときは、どのような理由でその加工が為されたのかが問われるでしょう。しかし、グリム童話を読むために、必ず兄弟の生涯を詳しく研究しなければならないわけではありません。

他方、「アンデルセンの童話」を分析する際には、彼の生涯についての一定の知識が必要になります。というのは、彼の童話は基本的に創作童話であり、その作品の誕生時期や創作過程を跡づけることができるからです。アンデルセンもデマークの古い民謡や民話のモチーフを用いています。最終的には自らの創作作品として発表しています。なお彼は、グリム兄弟の活動とその成果を十分に知っていただけでなく、面識もあり、彼らの前で自らの創作作品を朗読したこともありました。

例えば、予断は禁物ですが、「みにくいあひるの子」(一八四三年)の童話はアンデルセンの「最も深刻な自伝的物語」(高橋健二訳『アンデルセン童話全集Ⅱ』、小学館、四二八頁)であり、「白鳥は、豊かな天分を持ちながら、貧乏のどん底に育ったため、み

じめな苦しいめにあい続けたアンデルセンの幼年、少年、青年時代を反映」(同)していると解釈されています。もちろんこの解釈がすべてではありません。この作品が時代や地域を越えて多くの人々に愛されてきたのは、人間の「魂に普遍的に備わっている骨太な「成長物語」」(安達忠夫、前掲書、一一六頁)が、簡潔に語られているからです。グリム童話の場合と異なり、アンデルセンの生涯を知ることにより、その作品をより深く味わうことができるようになるのはたしかです。

・では、彼の自伝『アンデルセン自伝』(大畑末吉訳、岩波文庫)はどのように扱えばよいのでしょうか。

一八四六年、彼が四一歳のときに書かれた自伝は「私の生涯は波乱に富んだ幸福な一生であった。それはさながら一編の美しい物語(メルヘン)である。……この世には慈悲深い神がいて、一切をできるだけよいようにとお導きになる」と語りだします。しかし多くの研究者によると、この自伝は歴史的事実をありのままに描くというよりも、自らの思いを優先させており、歴史的一次資料としては使えないと判断されています。歴史批評学的視点からみるならば、この結論はたしかにまちがっていません。そのため以下に紹介する年譜を作成する際にも、自伝はあえて用いず、次のような資料を参考にしました——山室静著『アンデルセン

の生涯』新潮社、鈴木徹郎著『ハンス・クリスチャン・アンデルセン——その虚像と実像——』東京書籍、エリアス・プレスドーフ著『アンデルセン、生涯と作品』高橋洋一訳・アンデルセン童話全集別巻・小学館、安達忠夫『アンデルセン』清水書院。

しかし、ここであえて、もう一つの見方を指摘しておきたいと思います。それは、岩波文庫の翻訳の底本として用いられた書物の表題が *Das Märchen meines Lebens* となっていることです。直訳すれば、それは『わが生涯の童話』という意味であり、アンデルセンは、そもそも彼独自の「童話」のイメージを重ね合わせて執筆している可能性があります。もしそうだとすれば、この自伝は、歴史批評学的分析ではむしろ分析しきれない内容を含んでいるのかもしれないのです。

・最後に残された問題は、デンマーク語で出版されたアンデルセンの作品とその数が、次のように分類されていることです。

- ① 童話、一六五編。ただし現在ではこの中から九編が除かれ、一般に、一五六編で構成されたものが翻訳原本とされています。
- ② 詩、七七三編。
- ③ 戯曲、四七。
- ④ 小説、一二(長編と短編)。
- ⑤ 紀行文学、二三。
- ⑥ 自伝その他の伝記、一一。
- ⑦ その他(エッセイ、手紙、その他)、二九。
- ⑧ 風刺およびユーモア小篇、七。

この作品数から推測されるように、アンデルセンの全体像を明

らかにすることは、それほど容易ではありません。この状況において、アンデルセンの童話だけを取り上げて、しかもその中の数編を取り上げて、はたして彼の宗教意識に迫ることができのでしょうか、その主張にどれだけの妥当性があるのでしょうか？このような問いができてきても、まったくおかしくありません。これは、決して忘れてはならない問いです。しかしここでは、彼の作品には全体的なまとまりがあると想定して、出発したいと思いません。最初に上げるのはアンデルセンの年譜です。詳しく思うと感ぜられるかも知れませんが、ゆっくり読んでみてください。少しずつ彼について、あるイメージが浮かび上がってくるはずですよ。筆者には、「旅するアンデルセン」、「二つの世界を生きたアンデルセン」「磁石のようなアンデルセン」、「歌い、演じ、朗読するアンデルセン」といったイメージが湧いているのですが……

第一章 「アンデルセン年表」

西暦	年齢	事項
一八〇一		〔四月二日、ナポレオン戦争で中立だったデンマーク艦隊が英艦隊に砲撃される。国運衰退の始まり。〕
一八〇五		四月二日、ハンス・クリスティアン・アンデルセン（原語ではホー・セー・アナセンと発音する）、デンマークのフューン島の旧都オーデンセに生まれる——「人口

五千、貴族、高官、将校、富裕な商人、職人など上、中流階級の人々が住む反面、その半数以上は極貧にあえぐ人たちで、裏通りや路地裏の貧相な住居にひしめいていた」（鈴木徹郎著『ハンス・クリスチャン・アンデルセン——その虚像と実像——』東京書籍、四〇頁）。

「アンデルセンは自分を「泥沼の植物」と評したことがある。これは妥当な表現である。アンデルセンの家族的背景は、社会的に見て最低のものであった。赤貧、貧民窟、不品行に乱交。祖母は病的な嘘つき、祖父は精神障害者、母が行き着いた先はアルコール中毒、叔母はコペンハーゲンの女郎屋の女将。さらにアンデルセンは、どこかに生きている異父姉が突然現れて、以前とは違う環境にいる自分を困惑させるかもしれない、ということを経験にわたって意識していた。この考えは生涯彼につきまとい離れず夢にさえ現れた」（E・プレスドーフ著『アンデルセン——生涯と作品』高橋洋一訳、アンデルセン童話全集別巻、小学館、三〇頁）。父（ハンス・アンデルセン）は貧しい二三歳の靴屋（ギルド）に加入せず、日雇労働者として働く。母（アンネ・マリイ・アナスタター）は夫より七、八歳ほど年上で、文字を読めなかったが、働き者で清潔好きであった。母は息子を熱愛した。なお、母は、生年も生地も不詳の私生児であり、自らも、結婚する以前に私生児（娘カーアン・マリイ）を生んでいるが、アンデルセンの自伝はこれらのことについても沈黙している。父は「息子が幼いときから物語や芝居を朗読して聞かせ、人形劇場も作ってやった。アンデルセンの芝居や文学に向ける関心は、このときに芽生えていたといつてよからう」（鈴木徹郎・前掲書、四二頁）。

「彼は明らかに非常に早熟な子で、母と祖母に甘やかされ、

自分は他の子どもたちとは違うんだと二人から信じこ
まされた」(E・プレスドーフ、前掲書、三三頁)。

「エーレンスレーヤー(一七七九—一八五〇)、『千一夜物
語』をもとにした詩劇『アラジン』を刊行。彼は、ド
イツのロマン主義を受けつぎ北欧ロマン主義の基盤を
据えた詩人で、デンマークの国民的詩人とも呼ばれて
いる。なお、このアラジンは貧しい仕立て屋の息子で、
「わんぱくで手におえない野生児だった。邪悪な魔法使
いのたくらみによって、地下の洞窟にとじこめられて
しまうが、魔法の指輪やランプのおかげで、地下の財
宝を手に入れ、スルタン(＝サルタン)の姫君と結婚し、
ついに自らスルタンの玉座にのぼる。アンデルセン
自身、貧しい靴直し職人の一人息子として生まれ、父
親がいつも『千一夜物語』を読んでくれたせいもあって、
大自然の寵児アラジンこそ自分の分身であると感じて
いた。いつの日か、アラジンのように立身出世して、
人びとから賞讃される存在になるのだという素朴な願
いが、アンデルセンの一生をささえてくれたといつて
も過言ではない」(安達忠夫著『アンデルセン』清水書
院、一三頁以下)。

「十一月、英艦隊再びコペンハーゲンを砲撃。仕方なくナ
ポレオンと同盟したデンマークは英国に宣戦布告。」

「二月、スウェーデンに宣戦布告。三月、スペイン、フラ
ンスの連合援軍がオーデンセに進駐。デンマーク王フ
レデリック(フレゼリック)六世即位(一三九)。」

幼児学級などに通い始めたが、いずれもすぐやめてしま
う。しかし本を読むのが好きで、手に入るかぎりの書
物を読む。

この頃、オーデンセ劇場のサンドイツチマン、ベーター・
ユンケルと親しくなり、この劇場で観劇し、芝居遊び
に熱中する——「最初の観劇は五歳から七歳の間」(鈴

木徹郎・前掲書、四二頁)。六月、父が兵士として遠征
軍に加わる。

「ドイツでグリム童話第一巻初版が刊行される。」

「デンマーク国家財政の破産宣告。キルケゴール誕生
(一五五)。」

「三月、デンマークはスウェーデン、イギリス、ロシアの
同盟軍とキール条約を締結。」

父は帰国したが、疲労と喪心で精神に異常をきたす。

「スウェーデン・ノルウェー連合王国成立。ノルウェーを
失ったデンマークは小国になる。ナポレオン、セント・
ヘレナに流される。」

四月二十六日、父、三三歳で没する。この頃、牧師で詩人
であった故ハンス・クリスティヤン・ブンケフロード
(一七六一—一八〇五)の未亡人マリー・ブンケフロードと、その亡夫の妹に招かれて、家に入入りするよう
になる——一八一四年の夏、未亡人の末の男の子が
オーデンセ川で溺死。彼女の家で多くの本を借りて読
み、文学に目覚める。幼稚ながらいろいろと習作を試
みる。母は洗濯女として生活を支える。

七月、母が再婚する(相手のニールス・ヨーアゲンセン・
グナーセンは靴直し職人で、三二歳)。六月、コペンハー
ゲンの王立劇場の一座がオーデンセに来て上演。アン
デルセンは臨時に小姓役を演じ、舞台熱にとりつかれ
る。このころフューン島の中佐グルベアが彼を学校に
通わせたいと思い、当時フューン島の知事としてオー
デンセの宮殿に住んでいたクリスティヤン皇太子(後
のクリスティヤン八世)に引き合わせたが、成功しな
かった。

四月一八日。聖クヌート教会で堅信礼を受ける。九月四日、
母の反対を押し切つて、わずかの金をもってオーデン
セを離れ、三日目にコペンハーゲンに到着。王立劇場

に志願するが相手にされず困窮。ようやく劇場付属の音楽学校校長シボーニの個人指導を受けることになり、彼の家で出会った作曲家ヴィーゼ、詩人バツゲセンらの援助を受ける。しかし半年ほどで声変わりをし、舞踏に転ずる。

一八二〇

一五

五月、王立劇場付属のバレエ学校に所属し、端役で舞台に上がった。この頃から、詩人エーレンスレーヤー、自然科学者エアステッド、海軍大将ヴルフらと知り合う。

一八二二

一六

六月、王立劇場合唱団に編入される。

一八二二

一七

三月、劇作家になることを決意し、『ヴィッセンベアの盗賊たち』を書き、匿名で王立劇場に提出したが、六月に却下される。六月、合唱団から除籍される。しかしすでに出来上がっていた悲劇『アルフソール（妖精の太陽）』が、主任牧師グートフェルトの手により王立劇場の理事に提出される。結局、それは却下されたが、九月に王立劇場の理事会に呼ばれ、今後三年間、国庫からの奨学金を受けてグラマー・スクールに通うことが認められた。その際、「理事会は、今後何らかの処置を講ずる必要がある場合、コリン〔枢密顧問官・王立劇場財務担当理事〕の裁量に任せることにした。王室基金から金を支給しなければならないので、コリン氏はずぐ王のもとへ行き、王の口頭による承認を得た後、十月十八日、アンデルセンをコペンハーゲンの西五六マイルにあるスラーエルセ（スレーエルセ）のグラマー・スクールに入学させることに決定した。その校長に、シモン・マイスリング博士が任命されたばかりであった。アンデルセンはそこへ一八二二年十月二十六日に赴いた。スラーエルセに出発する前に、彼は個人的にヨナス・コリンに会いに行き、どんな問題が起きてても常にコリンを頼りにするようにと言われた。今後はヨナス・コリンがハンス・クリスティヤン・ア

ンデルセンの「親代わり」になるというのである。それに対してアンデルセンも、「お父さん」にきちんとお礼をしようと約束した（E・プレスドーフ・前掲書、六八頁以下）。『若者の試み』出版。

「このときアンデルセンは、コリンの家族とも初めて会った。一家は、ヨナス（四六歳、一七七六一八六一）、夫人のヘンリエッテ（五〇歳、一七七二一八四五）、長女のインゲボア（一九歳、一八〇三―八五）、長男のゴットリープ（一六歳、一八〇六―八五）、次男のエドヴァー（一四歳、一八〇八―八六）、次女のルイーサ（九歳、一八一三―九八）、三男のテオドーア（七歳、一八一五―一九〇二）という顔ぶれだった。やがてこの一家は、アンデルセンを家族同様に親しく思うようになり、アンデルセンもコリン家を、「真の我が家」とまで呼ぶようになる。とくに次男のエドヴァーは生涯アンデルセンと最も緊密な間柄となる……ヨナス・コリンは、その正義感とフェアプレーで一家の尊敬を一身に集めており、アンデルセンに対しても決してパトロンのような態度でなく、あくまでも父親として接していった。アンデルセンが苦難時代の最後に、ヨナス・コリンのような後援者を得たということは、アンデルセンの生涯にとって重要な意義をもっている。なおコリン夫人は唾に近く、のちにはほとんど目もみえなくなつた」（鈴木徹郎・前掲書、九六頁以下）。

義父のニールス・ヨーアゲンセン・グナーセンは五月に亡くなり、母は極貧の中にとり残された。彼女は洗濯女や知事公邸の雑役などをつとめたが、家賃が払えず、救貧院と精神病院を合併した「グローボア（灰色兄弟・フランシスコ会）病院」の分室に収容され、一八八三年一〇月七日、ここで亡くなった。八月二九日、アンデルセンの父方の祖母没。

一八二五	二〇	一〇月二十七日、マイスリング校長宅に寄宿。この頃から日記をつけ始める。最初の詩「臨終の子」を書く。
一八二六	二二	五月、ヘルシンゲアアのラテン語学校に転任したマイスリング校長と一緒に転校。
一八二七	二二	二月五日、アンデルセンの父方の祖父没。四月、ラテン語学校を退学してコペンハーゲンに行き、家庭教師のもとで受験の準備。「バルナトーク墓地の亡霊」。九月二十五日、「臨終の子」(原文と翻訳が「コペンハーゲン・ポスト」紙に掲載される)。
一八二八	二三	一〇月二二日、大学入学資格試験に合格し、翌日、コペンハーゲン大学に入学。同時に兵役にも服す(一三四)。
一八二九	二四	一〇月二四日、「時の悪魔」(「フリーヴェナ・ポスト」紙)。一〇月、ストア コンゲスガールデ33に転居。一〇月、一二月、大学の卒業試験に合格し、学業を離れる。一月二日、「徒歩旅行」。四月二三日、「ニコライ塔の恋」。九月一七日、一八日、「一八二九年、夏の旅行断想」(「コペンハーゲン・ポスト紙」)。
一八三〇	二五	五月、八月、フューン島からユトランド半島にかけて旅行。八月、フォーボアに住む大学の学友クリスティアン・ヴォイクトを訪ね、三人姉妹の長女リーボア・ヴォイクト(二四歳)に会う。アンデルセンは、すでに婚約者のいたヴォイクトに恋をする(アンデルセンの恋・その二)。一月二日、「詩集」。
一八三二	二六	一月一〇日、「幻想とスケッチ」。九月一九日、「影絵」。一〇月五日、「船」(戯曲)。五月、六月、第一回海外旅行。ハルツ、ザクセン、スイス旅行(1)。四月二七日、リーボア・ヴォイクト、婚約者のパウル・ヤコブ・ペエアヴィングと結婚。
一八三二	二七	「ヘーゲル(一七七〇)没」 ルイイサ・コリンに恋をする(アンデルセンの恋・その二)。彼女は、翌年、当時司法官見習で、のちに防衛局長となったW・リーン(リンド)と婚約し、七年後の一八四〇年に結婚。「ただこの時期はアンデルセンが前記のDu(デンマーク語の二人称代名詞で、お互いをDeと呼ぶか、それとも親しい間柄で用いるDuで呼ぶかという問答)の関係に最もこだわっていたときで、アンデルセンが名実ともにコリン家と同化したという気持ちだが、ルイイサとの結婚を想定させたというみかたもある」(鈴木徹郎、前掲書、二二八頁)。なお、「エドヴァー・コリンはアンデルセンの生涯を通じて、彼と最も緊密な交友関係を保っていた一人である。アンデルセンのために出版社との交渉、経理事務をはじめとして、原稿の綴字の誤りの訂正、作品に対する忌憚のない批評、またアンデルセンの性格の欠点などについても率直な忠告をした」(鈴木徹郎、前掲書、二四四頁)。E・プレスドーフはエドヴァー・コリンの性格についてこう記している。彼は「ほとんどあらゆる点で、アンデルセンとは正反対の人間であった。つまり冷静で、無口で、感情を表すことを嫌い、社会的に安定していて、自分の置かれた環境にしっかりと根を下ろし、伝統的な上流階級の教育を受け、自分とつきあう人間が「デンマークの古典を知り」デンマーク語を文法どおり正しい綴りで書けるのは当然なことだと考えている若者、将来優れた行政官になるであろう法学生、確固たる現状肯定者であった」(E・プレスドーフ、前掲書、一二三頁)。一〇月二日、「渡り鳥」(戯曲)。一二月一八、「二年の二二カ月」(詩)。
	一八三三	「ゲーテ(一七四九)没」
	二八	四月一三日、国王の決裁により旅行奨学金年間六〇〇リークスタラー二年間の交付を認められ。八月一四日、ヴィクトール・ユゴーを訪問。四月一二月、ドイツ、フランス、スイス、イタリア旅行(2)。三月二八日、「二六

一八三四	三〇	歳の女王」(戯曲)。八月一〇日、『詩集』。二月三日、『アゲネットと人魚の男』(戯曲)。「即興詩人」の執筆開始(ローマ)。ローマで母の死(二〇月七日)を知る。一月八月、イタリヤ、オーストリア、ドイツ旅行。九月一日、ニーハウン280(現在20)に転居。 「シュライアーマッハー(二七六八)没」 四月九日、第一の長編小説『即興詩人』。五月八日、『子どものために話して聞かせるお話』1(1)。二月一六日、同1(2)。
一八三五	三〇	一月一二日、『ケニルワースの祭りの歌』(戯曲)。四月一日、『めぐり会いと別れ』(戯曲)。四月二二日、第二の長編小説『O・T——苦悩の烙印』。八月、親友のエドヴァー・コリンがヘンリエッテ・ティーベアと結婚。
一八三六	三二	物理学者H・C・エアステッド(エアステズ)の次女ソフィー(二八二—八九)に恋をする(アンデルセンの恋・その三)。彼女は当時、まだ一六歳。一月二日、ソフィーは司法官見習フリッツ・デールストラムと婚約。E・ブレスドーフによると、「アンデルセンは、ソフィー・エアステッドと結婚できるといふ望みはほとんど持っていなかった。……今回彼は、最も親しい友人にすら秘密を明かさぬように用心した」(E・ブレスドーフ、前掲書、一八三頁)。「実際、アンデルセンのソフィー・エアステッドに対する熱中度は大したものではなかった。以前アンデルセンがルイーサ・コリンに恋をした時、ヨナス・コリンの女婿になるといふ期待が多分それにあずかって力があつたであろうように、今回はH・C・エアステッドの女婿になるといふ期待が、無意識のうちに恋の一因となつていたであろう。彼は確かにかなり早く立ち直つたようだ。一八三八年四月になると、彼は再びもっぱら自分自身
一八三七	三二	
一八三八	三三	に恋をしている」(同、一八六頁以下)。六月七月、スウェーデン(ストックホルム、ウプサラ)旅行(3)。四月七日、『子どものために話して聞かせるお話』1(3)。六月二八日、『即興詩人』(再版)。一月二日、第三の長編小説『ただのヴァイオリン弾き』。
一八三九	三四	五月一九日、『三篇の詩』。一〇月二日、『子どものために話して聞かせるお話』2(1)。二月一日より、ホテル・ド・ノアに移る(四七年五月—三日まで)。ランゲル伯爵の館で、同じスウェーデンのバルク伯爵、その息子、二人の娘を紹介される。二人とは長女ローヴィサ(一八一—七—一九〇〇)と二女マチルダ(一八二—四—四)であり、アンデルセンは次女のマチルダに恋をする(アンデルセンの恋・その四)。六月、スウェーデン旅行(4)。一〇一九日、『子どものために話して聞かせるお話』2(2)。一月二八日、『言語の)ポケットの目に見えぬもの』(戯曲)。二月二〇日、『絵のない絵本』。
一八四〇	三五	一月六日、ハンブルクでリストのコンサートを聴く。一月一〇日、初めて汽車に乗る(マゲデブルク—ライプツィヒ間、約三時間半)。一月一六日、初めて銀板写真を見る(アウクスブルク)。四月、スウェーデン旅行(5)。一〇月—二月、ドイツ、オーストリア、イタリヤ旅行(6)。この海外旅行の直前にアンデルセンはマチルダ宛てに手紙を書いたが、彼女からの好意的返信が仲介者の失念により三年後ようやく彼ののもとに届いた。しかし手紙が届くのがあまりに遅すぎ、その間に、マチルダはコペンハーゲン駐在のベルギー大使と婚約し、アンデルセンもイエニイ・リンドに夢中になつていた。二月五日、『混血』(戯曲)。一〇月二七日『緑なるものにおける喜劇』(戯曲)。二月一九『荒野の娘』(戯曲)。

一八四二	三六	七月五日、ライプツィヒでメンデルスゾーンを訪問。一月七月、イタリア、ギリシア、トルコ(ルーマニア、ブルガリア、ユーゴスラビア)、ハンガリー、オーストリア、ボヘミア、ドイツ旅行(7)。二月二〇日、「子どものために聞かせるお話」2(3)。	一八四二	三七	七月二六日、「白鳥の雛(童話「みにくいアヒルの子」)を起稿。四月三〇、「詩人の市場」。	一八四五	四〇	七月二六日、ヤーコプ・グリムを訪問(ベルリン)。ヴァイマルで世襲大公カール・アレクサンダー(後の大公)との友情が始まる。八月三〇日九月八日、クリステリアン八世および女王カロリーヌ・アマリーの客となる。五月八月、ドイツ旅行(9)。二月二三日、「王の夢(戯曲)。二月二日、「新しいお話1(2)。「詩人としての俸給」が年額六〇〇リクススタラーに引き上げられる。一〇月十二月、ドイツ旅行(10)。二月二日、「幸運の花」(戯曲)。四月七日、「新しいお話1(3)。
一八四三	三八	三月一五日、ヴィクトル・ユゴーを訪問(パリ)。三月二〇日、アレクサンデル・デュマを訪問(パリ)。「アグネーテと人魚の男」が王立劇場でやじられる。三月二六日、ハインリッヒ・ハイネを訪問(パリ)。九月九日、ブルノンヴィエ家でスウェーデンの歌手イエニ・リンド(二三歳)と会う。九月一〇日、リンドを愛するとカレンダー日記に記す(アンデルセンの恋・その五)。「彼女は自国ではすでに名を知られ、人気があったが、数年後には、ヨーロッパの女性歌手中最も名高く、賞賛を一身に浴びる存在となり、「スウェーデンのナイチンゲール」としてあまねく知られるに至った」(E・プレストーフ、前掲書、二二九頁)。一月六月、ドイツ、ベルギー、フランス旅行(8)。一月二一日、「新しいお話」1(1)。「この時、「子どものために語られた」という言葉が初めて意図的に扉から削られた。というのは、自分の話——少なくともその大部分——は次元の異なった二つの読み方ができるように書かれているということ、この際示したいとアンデルセンが考えたからである。一つは、「物語そのもの」、「プロット」、そしてアンデルセンのいう「飾り」を好む子どもたちの読み方。もう一つは、底に流れている理念、童話に含まれている人生観を理解することのできる大人の読み方である」(E・プレストーフ、前掲書、二二三頁)。	一八四六	四一	二月六日、ロシアの「赤鷲十字章」を授与される。九月一八日、「ダンネブロー騎士十字軍章」(デンマーク)を授与される。一月一〇月、ドイツ、オーストリア、イタリア、フランス、スイス旅行(11)。五月二日、「リーデン・キアステン」(戯曲)。二月二六、「詩集、新と旧と」。			
一八四四	三九	七月二二日、ロバート・シューマンを訪問(ライプツィヒ)。	一八四七	四二	六月一九日、ハーグでアンデルセンのための祝祭(オランダ)。八月三〇日、ディケンズを訪問。	一八四八	四三	五月九月、ドイツ、オランダ、イングランド、スコットランド旅行(12)。一月二月、「詩をまじえないわが生涯の物語」(最初の自伝)をドイツで出版。四月六日、「新しいお話」2(1)。一〇月一日、ストリア コンゲスガーデ49に転居。
								「二月二〇、クリステリアン八世没。フレデリック七世即位。三月、第一次ドイツ・デンマーク戦争。デンマーク王シユレスウィヒ・ホルスタインの要求を拒否。内線勃発。九月一日、休戦協定。マルクス「共産党宣言」。三月四日、「新しいお話」2(2)。一月二五日、第四の長編小説「二人の男爵夫人」(九月二八日、ロンドンで英訳版を先に出版)。二月一八日、王立劇場設立百周年記念祭にアンデルセン作「芸術のデンマーク」が

一八四九	四四	<p>上演される。一〇月一日より一八六五年九月一四日まで、中斷のときをふくめて、ニーハウン67に転居。「一六六〇年以來つづいていた専制君主制が廃止され、自由憲法が制定されて、男子普通選挙に基づく国会が国会最高の機関となった。久しい専制君主制によって、すでに貴族階級の勢力は失墜し、自由憲法によって王権は制約されたから、市民勢力が著しく伸張した。……デンマークでは極めて平穩理にこの改革が遂行された」(鈴木徹郎、前掲書、四二六頁)。</p> <p>五月八月、スウェーデン旅行(13)。一月二九日、「コモ湖の婚姻」(歌劇)。八月九日―二月一八日、「童話集」(Eventyr) (ベターセンのさし絵入り)。一〇月一三日、「真珠よりも、黄金よりも」(戯曲)。</p> <p>七月一三日、シュレスウイヒ(デンマーク語・ドイツ語圏、公用語はドイツ語)、ホルスタイン(ドイツ語圏)と開戦。</p> <p>一月七日、「オスキレの一夜」(ヴォードヴィル)。三月八日、「オッレ・ルゲイエ」(戯曲)。四月一三日、「新分婉室」(喜劇)。</p> <p>〔休戦協定〕</p> <p>三月九日、H・C・エアステッド没。三月一三日、ハートマン夫人の埋葬。一〇月六日、プロフェッサーの称号を授与される。五月九月、ドイツ旅行(14)。二月一八日、「戦時下の祖国を謳う詩歌」。五月一九日、「スウェーデンにて」。一二月二日、「ニワトコおばさん」(戯曲)。</p>	一八五三	四八	<p>ていたのかという疑問が残るのではなからうか。旅における視点と同様に恋愛でも、アンデルセンはただ美の幻影を追うことに終始していたのかもしれない(前掲書、四〇五頁)。</p> <p>五月七月、ドイツ、イタリア、スイス旅行(15)。四月五日、「物語」1。一月三〇日、「物語」2。</p> <p>〔夏、コペンハーゲンでコレラが大流行。三カ月足らずのうち五千近い人々が死んだ。〕</p> <p>二月二三日、「水の精」(歌劇)。一月七日、「著作集」Vol. 14。</p> <p>五月七月、ドイツ、オーストリア、イタリア旅行(16)。</p> <p>六月一九日、「童話集」再版。〔著作集〕Vol. 5-14。</p> <p>八月二四日、リヒャルト・ヴァーグナーを訪問(チユールリヒ)。六月九月、ドイツ、スイス旅行(17)。デンマーク語版全集刊行開始。一月二四日、「田舎町の物語」(戯曲)。四月三〇日、「物語」5。七月一九日、「わが生涯の物語」。</p> <p>六月九月、ドイツ旅行(18)。</p> <p>二月五日、新築成った王立劇場開演。五月九月、ドイツ、ベルギー、イギリス、フランス旅行(19)。(六月一日七月五日、ガッツ・ヒルおよびロンドンのディケンズ宅に滞在)。五月二〇日、第五の長編小説「生きるべきか、死ぬべきか」(同月、デンマークに先んじてロンドンで英訳出版)。</p> <p>三月一三日、ダンネブローマン勳章(デンマーク)を授与される。九月一三日、ハンブルクからニューヨークに向かった汽船「オーストリア号」が炎上し、ヴルフ海軍大将の長女ヘンリエッテ・ヴルフも焼死した。五六〇名の乗客のうち、生存者は九〇名。アンデルセンは生涯彼女の悲惨な死を忘れず、嘆き、アメリカの地を踏もうとしなかった。「アンデルセンとヘンリエッ</p>
一八五〇	四五	<p>イェニイ・リンドは、九歳年下のイギリスとドイツの混血のピアニスト、オット・ゴールドシュミットと結婚。アンデルセンとイェニイ・リンドの関係について、鈴木徹郎はこう記している。「従来のアンデルセンの恋愛と同様、どこまでアンデルセンが真剣にリンドを恋し</p>	一八五四	四九	
一八五一	四六	<p>曲)。</p>	一八五六	五一	
一八五二	四七	<p>曲)。</p>	一八五八	五三	

<p>人の祝祭（パリ）。五月二十六日、デンマーク国王夫妻の銀婚式。同日、アンデルセンは枢密顧問官の称号を授与される。九月七日・二十二日、パリ万国博覧会を見学。</p> <p>二月六日、オーデンセの名誉市民に推戴される。「フューン新聞」によると、「詩人は概略次のような謝辞を述べた。「故郷の町からただ驚くばかりの、かくも大きな榮譽を与えていただき、ただもう動転して、のぼせ上がっております。私はエーレンスレーヤーのアラディンを思い出さずにはいられません。あの不思議なランプをたずさえて光まばゆい自分の城に着いたときに、彼は城の窓辺に寄って、こう申しました。今見おろしているあのあたりを、かつて一介の貧しい少年だった私は歩いてきたのだ」と。私にも神は、詩という、不思議なランプを与えてくださいました。それが国々の上にきらめき、人々がそれを喜び、称賛して、この光はデンマークから輝いたのだというとき、わたしの胸は喜びに高鳴りました。……」（鈴木哲郎、前掲書、四五二頁以下）。「歌声が鳴り響いた。私は気が動転するばかりだった。と同時に肉体的にもまいってしまっ</p>	<p>一八六八</p>	<p>六三</p>	<p>ドイツ、フランス旅行（28）。二月二日、『二五編のお話および物語』（童話集、ロレンツ・フレアリックのさし絵入り）。二月二日、『知られたる、および知られざる詩』（詩集、一八二三・一六七）。</p> <p>四月・七月、ドイツ、オランダ、ベルギー、フランス、スイス旅行（29）。一月一九日、『旅のスケッチとペン画』。二月五日、『木の精』。</p> <p>九月六日、アンデルセンのコペンハーゲンに出てきた日の五〇周年記念祭。九月・十二月、ドイツ、スイス、フランス旅行（30）。二月一七日、『三篇のお話および物語』。</p> <p>一月三月、フランス、ドイツ旅行（31）。一月二日、『幸せもののピリア』。「大きな家の裏屋根部屋に両親と共に住むピリアは、その家の大部分を占めて暮らす金持ちの商人の息子フェリクスと同じ日に生まれた。が、後者が富以外になにも誇るべきものをもたない人生を送るのに対して、音楽の天分に恵まれたピリアは、パレエ・ダンサーとなり、歌手となり、やがて人々の称賛の的となって栄光に輝く。人気絶頂のときに、オペラ「アラディン」の主役を演じて万雷の拍手を浴びるが、鳴りやまぬ拍手のうちに心臓発作で死ぬ」（鈴木徹郎、前掲書、四七四頁）。二月一〇日、『お話および物語』（童話集、ロレンツ・フレアリックのさし絵入り）。</p> <p>九月一九日、トリアデンスキオルスガデー17に転居。</p> <p>八月一八日、植物園におけるアンデルセンのための祝祭（ノルウェーのクリスチャニアで）。七月・八月、スウェーデン、ノルウェー旅行（32）。一月二三日、ニーハウン18に転居（一八七三年四月二日）。</p> <p>九月一日、N・F・S・グランドヴィーの葬儀に参列、四月・六月、ドイツ、オーストリア、イタリア旅行（33）。</p> <p>三月三〇日、『新しいお話と物語』3（1）。十一月</p>
<p>た。生涯最高のこの幸福の絶頂にあつて、それを味わうことができなかつた。耐え難い歯痛であつた。まとも流れ込む氷のような冷気が、激痛をおおりにたてた。……苦痛もまた絶頂の瞬間だった。たいまつのように燃えていた炎が消えると、私の苦痛も消えた。どんなに神に感謝したことか！」（同、四五五頁）。「歯痛・頭痛・腹痛・のどの痛みなどを常時訴えている。とくに歯痛は少年の頃からひんばんで、これはまた精神状態とも密接に相関していたようである。不安になったり、焦燥感にとらわれるとたいい歯痛になった」（同、四八九頁）。</p>	<p>一八七二</p>	<p>六七</p>	
<p>四月・六月、ドイツ、フランス、スイス旅行（27）。九月、</p>	<p>一八七〇</p>	<p>六五</p>	
<p>一八七二</p>	<p>一八七二</p>	<p>六六</p>	

一八七三	六八	二三日、同3(2)。
一八七四	六九	四月七月、ドイツ、スイス、イタリヤ(ニコライ・ペエ アが同行)(34)。九月一〇日、クララおよびベイリン 家に寄宿(一八七五年六月二日)。
一八七五	七〇	一二月二〇日、『お話および物語』(童話集、ロレンツ・ フレアリックのさし絵入り)。 四月二日、『二五ヶ国語によるある母親の物語』。六月 一二日、メルキオア家の別荘「オーリグヒード(休 息、平和、閑静、の意)」に移り、ここで八月四日に永 眠。「最近では、日記その他に示されている症状から、 癌ではなくて、心不全のために死んだという見方が強 い」(鈴木徹郎、前掲書、四八九頁)。コペンハーゲン の聖母マリア教会で国葬が行われ、アシステンス墓地 に埋葬される。すぐ近くには、二〇年も前に亡くなっ たキルケゴールが眠っている。墓碑には次のように記 されている。これは、一八七四年に書かれた「老人」 という詩から取られた句で、その最後の四行にあたる。 「神がおのが姿に儼り給いし人の霊は、 朽ちることなく、消ゆることなし 地上の生命は、永生の種子 肉は亡ぶれども、霊は死なず」 (鈴木徹郎、前掲書、四八八頁以下) なお、安藤忠夫は同じ句を次のように訳しています(前 掲書、一五七頁)。 「神がおのれの似姿に造りたまひし魂は 不滅にして失われることなし われらの地上の生は、永遠の種なり われらの体は死すとも、魂は死なず」

注 (一)は海外旅行の回数を表す。ただし(一)*は、鈴木徹郎・前掲書
が海外旅行に数えていないものを指す。

メルヒエンと宗教教育(一)

第二章 童話

本章の課題は、「アンデルセンの「童話」に表れた宗教意識」
を明らかにすることにあります。対象が「童話」であるため、し
かもアンデルセンが自らの作品を人前で朗読することを好んだこ
とを考慮し、本章では、たとえ周知の内容ではあっても、まず、
なるべく各作品の内容をなぞるような仕方で紹介することにしま
す。そしてその過程で、少しコメントを加えるという形式をと
ります。

なお、ここで用いた引用文献は、主に次の二つです——高橋
健二訳『アンデルセン童話全集』全五巻、小学館。大畑末吉訳『ア
ンデルセン童話集』全七巻、岩波書店。引用の際には、前者を基
本とし、後者からの引用には、岩波訳と付記することになります。
また以下の引用では、読みやすくするために、原文の平仮名や漢
字等を適宜変更してあります。また、以下の標題の前に付され
ている番号は、前者の文献で用いられている作品番号です。

・ 53 「ある物語」

この話は、三幕から成り、第一幕の季節は「りんごの木が一斉
につぼみを開く」頃、そして第二幕の季節は晩秋と設定されて
います。

第一幕の第一段落は、春を迎え、「お日さまの光」が力を増す中で、植物も動物も鳥も喜び歌う日曜日の場面から始まります。そしてそれは、「たしかに暖かい恵まれた日だったので、『神さまはわたしたち人間に、本当にたいそう親切にしてくださいます！』と言うことができたでしょう」という言葉で終わっています。岩波訳では、「神さまって、本当に、私たちが人間にお情け深い方だ！」となっています。

第二段落は、教会の中で牧師が「たいそう大声で怒って話している様子が描かれています。それは、悪人は地獄へ行くという話で、「教会の中の人はみんなすっかりおびえています。しかし」外では小鳥が一斉に楽しそうに歌い、お日さまは暖かく照っており、小さい花の一つ一つが、神さまはわたしたちみんなにたとえようもなく親切にしてください（「お恵み深いかた」岩波訳）、と言っているようでした。ええ、その外は、まったく牧師さんのお説教のようではありませんでした。」そしてこの段落は、「かぎりもなくやさしい神」さまが、悪の誘惑が外からも内からも迫ってきていることをよくご存じの神さまが、どうして罪深い人間を永久に火で焼いたりできるのか、分かりません、という牧師の「奥さん」の言葉で結ばれています。

第二幕は、この「真面目な厳しい」牧師の妻が亡くなり、亡霊となって現れる場面から始まります。彼女は、神さまのみもとで

恵みを受けるとすればあなたしかいない、と言われた信心深い女性でした。しかし彼女は墓の中でまだ平安をえていなく、それを受けると、「神さまから地獄に落とされて永久の苦しみをなめる罪人、その人の毛」が必要ですと訴えます。

そこで二人は、永久の苦しみに落とされている人を探しに出かけます。最初に「高慢、欲張り、酒乱、情欲など」七つの大罪が満ちている屋敷に出かけました。しかし高慢な者はいても、彼は永遠の火に焼かれるような者ではありませんでした。貪欲な者も、気が狂っているだけであり、短気な犯罪人たちも殺されてはいませんがなく、殺されかけた犯罪人を見て、牧師は「不幸な男だ！」と叫んで助け出そうとしました。

すると突然、場面が変わり、「二人は贅沢な広間や貧しい小屋を」通り抜けて飛んでいきました。「情欲や嫉妬など、救われない大きな罪がそばを通り過ぎました。裁きの天使が彼らの罪と弁護とを読み上げました」。「神さまにとっては、それは小さいことでした。神さまは人間の心をお読みになります。神さまは何もかもご存じです。内からくる悪も、外からくる悪も。神、それは恵みであり、愛であります。牧師さんの手は震えました。今となっては、手をのばして、罪人の頭から髪の毛を引きぬく気には、とうていなれません。涙が両の目からあふれ出しました。それは、地獄の永遠の業火を消す恵みと愛の水でありました」（岩波訳）。

そのとき、おんどりが鳴きました。「憐れみ深い神さま！妻に墓の中の安息をお与えください。それをえさせてやることは、わたしにはできませんでした」。

「今、わたしはその安らぎをえました」と、死んだ妻は言いました。「あなたの厳しい言葉と、神さまと神さまのお造りになったものへのあなたの暗い信仰とが、わたしをあなたのところへ駆り立てたのです！人間をお知りになってください。悪人の中にも神さまの一部が、地獄の火に打ち勝って、それを消す神さまの一部が、宿っているのです」。

第三幕はわずか三行しかなく、こう語ります。「牧師さんの口にキスをする人がありました。同時に、あたりが明るくなりましした」(岩波訳)。神さまの明るいお日さまが部屋に差し込んできました。「そこには牧師さんの奥さんが生きていて、いつものとおりやさしくおだやかに、牧師さんを夢から起こしているのです。神さまのおつかわしの夢から」(岩波訳)。

第三幕の「明るいお日さま」という言葉にふれて、まず気づくのは、第一幕の冒頭部で、お日さまの光が引き起きます春の喜びこそ、神の親切で情け深い性質を表し、その第二段落でも、暖かい日ざしが神の恵み深い性質を示すと語られていたことです。アンデルセンにとって、太陽の光は特別な意味をもち、その光のもと

で再生する自然は、やはり特別な世界であるようです。ここには、デンマークで育った北欧人の太陽に対する深い思いが込められているのでしょうか。

罪と地獄の問題にも独特な解釈が加えられています。「裁きの天使がいちいち、罪人たちの罪と、その罪の言い聞きとを読み上げました。神さまにとっては、それは小さいことでした。……神、それは恵みであり、愛であります」(岩波訳)と明言されています。この論理の帰結が、悪人の中にも神さまの一部が宿っている、という言葉です。しかし、地獄の業火に打ち勝つこの「神さまの一部」とは、一体何を意味するのでしょうか。これだけでは、必ずしもはっきりしません。

最後になってようやく、第二幕は夢の中の話であったと分かるのですが、このように神の意志が夢を通して示されるとする発想は、今や、必ずしも幼稚なものとはいえません。深層心理学的解釈はこの夢をまじめに受けとめ、対話の相手としているからです。わたしたちもその意味についてじっくり考えてみる必要があります。また、「涙」が地獄の火を消すとされていますが、アンデルセンにとって「涙」が特別な意味をもつことは、『雪の女王』のゲルダの「涙」が示す通りです。彼の作品に現れる様々な「涙」の場面を集めて検討するならば、きっとその深い意味が浮かび上がってくるはずですよ。

この話で最後までピンとこなかったのは、「ある物語」という表題です。アンデルセンはなぜこのような曖昧な表題を選んだのでしょうか。一五六ある作品の中で、この題だけがあまりにも漠然とし、浮いているような気がしてなりません。反論をおそれたのでしょうか。それとも……

・40 「とりでの土手からの一場面」

この話は、二頁余りの本場に短い作品です。岩波訳では「城の土手から見た風景画」という表題になっています。季節は秋、時刻は、夕日が沈もうとしている頃、そして場所は、スウェーデンの海岸がみえる、重罪人のための牢獄と設定されています。夕日の一筋の光線が暗い部屋に差し込み、格子のところどころで一羽の小鳥が「キーヴィット！」(岩波訳、「クビイビット」小学館訳)と歌っています。アンデルセンはその光景を描写しつつ、ひとつのメッセージを書き込んでいます。「お日さまは悪人の上にも善人の上にも照ります！」「鳥は悪人のためにも、善人のためにも歌います！」と。

この言葉は、新約聖書の「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」(マタイ五・四五)という句を思い起こさせます。この句の前には「あなた方も聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』

と命じられている。しかしわたし(イエス・キリスト)は言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの父の子となるためである」という言葉があります。したがってもしもアンデルセンがこの句を念頭においていたとすれば、あのメッセージは、読者にも、この句を思い起こしつつ読むことを期待していたこととなります。

この夕日と小鳥の絵画的描写に続いて、それをみつめていた悪人の顔に表れたやわらいだ表情と、心の中に起こった静かな出来事が描かれています。「小鳥は囚われ人の格子から飛び去り、光線は消えます。小さい部屋の中は暗く、悪い人の心の中も暗いのですが、それでもお日さまは中に差し込み、小鳥は中に向かって歌いました。響き続けよ、美しい漁師の角笛よ！夕べはなごやかで、海は鏡のようになめらかで静かです」と。

この最後の描写は、主観と客観が融合した仕方で提示されており、しかも囚われ人の思いを越えて、美しい角笛が響き続けよ！と命じられています。作者は、おだやかな夕べと鏡のように静まり返った海から、この声を聞いていますが、はたして読者もそれを聞くことができるでしょうか……。

・32 「鐘」

続いて紹介するのは、やはり夕日が沈む頃から話がスタートす

る「鐘」です。その鐘の音は、都会では一瞬しか聞こえないのですが、町はずれに行くと、夕靄もやにかすむ静かな森の奥から聞こえてきました。しかし、その響きがどこからくるのか、これをつきとめたひとはいませんでした。

ちょうど、堅信礼が授けられた日、つまり子供からいつべんに大人になった日、若者たちも鐘の音を聞き、森の教会を目指して出発しました。しかしなかなかみつからず、多くの者は途中であきらめてしまいます。最後に残ったのは、王子と、後からやってきた貧しい少年だけでした。茨のしげる森の中で、王子は左向かって、貧しい少年は右に向かつて、それぞれ自分の道を進むことにしました。王子は「お日さま」に導かれてどんどん奥に入つて行きますが、結局、みつからず、「丸い赤いお日さま」をもう一度みるために、一番高い岩山に登りました。そしてそこで目にした光景を、作者はこう描いています。

・岩山に登りついて、そこから、お日さまが沈みきるのをみました。ああ、なんとというみごとさ！海が、長くうねる大波を岸に打ち寄せる壮大な海が、彼の前に広がっていました。お日さまは、海と空の触れあうところに、輝く大きな祭壇のように浮かんでいました。何もかもがまっ赤に燃える色に溶け合っていました。森が歌い、海が歌い、彼の心が一緒に歌いました。自然全体が大き

な神聖な教会でした。その中で、木々と漂う雲が柱になり、花と草がピロートの敷物になり、空が大きな丸天上になっていました。外ではお日さまが沈むと、赤い色が消えましたが、幾百万もの星に火がともり、幾百万のダイヤモンドのランプが輝きました。王子は両腕を空と海と森に向かつて広げました。——そのとき、右の方の脇道から、短い袖の服を着、木靴をはいた貧しい少年がやってきました。少年は、自分の道を歩いて同じ時にここに着いたのでした。二人はかけよって、自然と詩との大きな神聖な教会の中で手を取りあいました。二人の上で、みえない神聖な鐘が鳴り響き、祝福された精霊たちが踊りながら周りをただよい、神をたたえる歓喜のハレルヤを唱えました！

この終りの部分には、アンデルセンの思いがはつきりと現れています。ここに描かれている海はどこなのでしょうか。夕日が沈む場面を輝く祭壇とみなし、森が歌い、海が歌うと形容し、「自然全体が大きな神聖な教会でした」と明言しています。それ「自然と詩との大きな神聖な教会」とも言い換えられています。アンデルセンはもともと詩人になろうとしたという事実を思い起こすならば、あの鐘の音を聞くことがでるのは、やはり詩人の心をもつ者だけだ、ということになるのでしょうか。「自分の道を歩いて同じ時にここに着いた」貧しい少年、それはアンデルセン自身

に他なりません。この話から判断するかぎり、彼は、たしかに自然神秘主義の系譜に属しています。

・55 「ちがいがあります」

これは、自らの美しさに自信をもつ「りんごの枝」の話です。五月になり、「いかにもみずみずしく華やかに、今にもほころびそうなかわいらしいバラ色のつぼみをあふれるほど」（岩波訳）つたりんごの枝は、自分の美しさを知っていました。この枝の美しさに心を惹かれた若い伯爵夫人は、それを手折って持ち帰り、花びんにいけました。伯爵夫人の家にはいろいろな人が訪れ、それぞれ身分にふさわしい言葉でこの枝をほめたり、無視したりしました。この経験から、りんごの枝は、人間にも「ちがい」があることを知り、ちようと開いていた窓の外にみえる庭や野原の花をみて、貧しい花の不幸を想像しました。特に気の毒にみえたのは、誰も見向きもしない「たんぼぼの花」でした。それはあまりに繁殖力が強い「悪魔のミルクおけ」と呼ばれていました。ところが、「ちがいだって？」と、お日さまの光が言いました。そして花の咲いているりんごの枝にキスをしました。「けれども、それと同時に、野原に咲いている黄色い「悪魔のミルクおけ」にもキスをしました。お日さまの光の沢山の兄弟たちもみんな、貧しい花にも豊かな花にも一様にキスをしました。りんごの枝は、

神さまのかぎりない愛が、生きとし生けるものすべてに注がれていることを今まで一度も考えたことはありませんでした。また、この世にはどんなに多くの美しいものや善いものが隠れていて、しかも決して忘れられてはいない、ということを考えることもありませんでした。——しかしこれまた、まことに《人間らしい》ことでした！」（岩波訳）。

この後、話の場面は変わり、野原に咲いたんぼぼの花をつんで楽しむまだ小さな赤ちゃん、この花の茎をつないで長い鎖を作って遊ぶ子どもたち、さらに、花の咲ききった茎の先についている綿毛のような種（「小さな小さな美術品」）を吹き飛ばして遊ぶ年長の子どもたちが登場します。ところがりんごの枝は、それでもたんぼぼの花の美しさと力を認めませんでした。

そこに、ひとりのおばあさんが現れ、たんぼぼの根を引き抜き、その一部を煎じて飲み、残りを薬として薬屋に売りました。しかしりんごの枝は、「美とはもつと高尚なものだ」、人間の場合と同様に、草木の間にも「ちがいがあるのだ」と言い張りました。

これに対しお日さまの光は、改めて、「神さまのかぎりない愛は、神さまのお造りになったすべてのものの内に、また命のあるすべてのもの内に行き渡っていること、そしていつの世にも永久に変わることなく、すべてのものが公平に分かたれていることを語り聞かせました」（岩波訳）。

こうして最後の場面が訪れます。あの若い伯爵夫人が、慎重に運んできた花をみてこういいます。「ごらんなさいませ！なんとこの不思議な美しさを、神さまはこの花にお与えなさったんでしよう！……わたし、この花をりんごの枝と一緒に絵に描いてみましょう。……この二つの花は、それぞれがいはいあっても、やっぱり同じ一つの美の国から生まれた二人の子どもにちがいはありません」(岩波訳)。「この花」とは、もちろんあの貧しい花の最後の姿です。

この話でも、お日さまが貧しい花にも、豊かな花にもキスをするという表現で、繰り返し、神の愛がすべてのものにかぎりなく注がれていることが強調されています。先に、53話の「ある物語」のところ、「アンデルセンにとって、太陽の光は特別な意味をもち、その光のもとで再生する自然は、やはり特別な世界であるようです。ここには、デンマークで育った北欧人の太陽に対する深い思いが込められているのでしょうか」と述べましたが、アンデルセンにとってお日さまは、単に自然現象であるだけでなく、かぎりなく注がれる神の愛の象徴となっています。32話の「鐘」の中では、このお日さまは夕日として登場しており、今後、アンデルセンの童話を読む際には、常に「お日さま」の働きに注意する必要があります。それは、一瞬のうちに多くの花が咲く北

欧の春のイメージと重なっています。また、この話にも「おばあさん」が登場します。アンデルセンの童話の場合、そこには、自身の祖母のイメージと、昔話に登場するような、より普遍的な存在としての「おばあさん」のイメージが重なっているようです。必要以上にその存在にこだわることは避けなければなりません。「グレイトマザー」のような母なるものの存在がイメージされていることはたしかです。

・ 8 「人魚ひめ」

これは、アンデルセンの童話の中でも『みにくいあひるの子』と並んで、よく知られている話です。しかし、文庫本で三八頁にも及ぶ長いストーリーのため、もとの物語を読んでいるひとは意外に少ないのかもしれませんが。今回は、専らアンデルセンの宗教意識に焦点を合わせているので、要点を絞って紹介しましょう。

物語はまず、海底にある「人魚の王様のお城」とそこに住む人魚たちの生活について語り始めます。王の妃はすでに亡くなっており、「年とったお母様」つまり祖母が六人の孫娘たちのめんどろをみています。娘たちは一五歳になると、海面に浮かび上がり、広い世界をみるのがゆるされます。「おばあさま」から聞いていた海上や陸上の世界を、自分の目でたしかめることができます。六人姉妹の末っ子がこの物語の主役であり、長女が海面に浮か

び上がってから五年目に、ようやくその機会がきました。五人の姉たちは、初めて海面に浮かんだとき、たしかにその美しさに魅了されました。しかし一人前になっても海面に上がる事ができるようになると、むしろ「海の底が一番美しい、家にいる方が気持ちがいい」と思うようになりました。

あるとき、末娘はひとりの若い王子を助けました。彼は、悪天候の中で難破した船から放り出され、海中に沈んで行くところでした。彼女は、助け出した王子を教会の前の砂浜に連れて行き、寝かせました。すると間もなくそこへ一人の若い娘が現れ、王子を介抱しました。王子は、自分の命を助けてくれたのはこの娘だと思いました。

海底のお城に戻った末娘は、王子への恋心に苦しみ、一人の姉にその気持ちを打ち明けると、姉たちはこの王子の情報を他の人魚たちから集めてくれました。この情報を手がかりに、やがて末娘は王子の住む城をみつけだします。そして毎晩、遠くから王子の生活の様子を伺っているうちに、いつか自分も人間になって、彼らの世界に住みたいと思うようになりました。しかしそれにはどうすればよいのか分からず、「おばあさま」に相談しました。祖母は、孫娘の質問にこう答えます。

・人間だって死ななきゃならないのよ。それどころか、人間の命

は、わたしたちの命よりもっと短いのよ。わたしたちは三百歳にもなれるでしょう。でも、わたしたちは、ここにすることをやめれば、水の上の泡になってしまうの。そして、この底で親しい人たちの間に、お墓を作ってもらうこともできないの。わたしたちは、死ぬことのない魂をもっていないの。また、生まれかわることも決めないの。わたしたちは緑の《葦》の葉のようなものよ。一度切られてしまうと、もう二度と緑の葉をだすことはできないの！ それに比べて、人間は、いつまでも生きる魂をもっているの。身体が土になってしまっても、魂は生きているの。魂は、すんだ空気の中を昇って、さらさら光るお星さまのところへ行くのよ！ わたしたちが、海から浮かび上がって人間の国々をみるように、人間は、わたしたちが決してみることでできない、誰も知らない美しいところへ昇れるのよ。

まだまだ話の途中ですが、ここでいったん立ち止まり、「おばあさん」の言葉に耳を傾けてみましょう。ここにはアンデルセンの宗教意識がはつきりと現れているからです。宗教とは何かと問うことは、人間とは何か、世界とは何か、と問うことでもあり、宗教は必ずある人間観と世界および宇宙観を前提としています。彼の場合、この人間の特質は、人魚との対比によって明らかにされます。まず、寿命の長さが違います。長生きしても、人間は

百歳ぐらゐまでだとすれば、人魚はその三倍も生きることができません。しかし人間には、死ぬことのない魂があるのに対し、人魚には魂がありません。そして人が死ぬと、その魂は星の光る美しいところへと昇って行くことになっています。

このような理解は、日本の読者にはそれほど違和感がないかもしれませんが、ヘブライズムの伝統からみると、かなり異質な思想です。というのは、ヘブライズム、つまり旧約聖書の伝統を受け継ぐ諸宗教（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）の理解によると、人間の身体と魂は区別することができても、分離することはできないからです。したがってキリスト教文化圏、しかもプロテスタントの伝統を背景とする世界では、身体は死んでも、魂は死なないという思想は、本来、受け入れられないはずです。しかしそれにもかかわらず、霊魂不滅説が唱えられているとすれば、それはヘブライズムではなく、他の伝統、つまりヘレニズムに由来していると考えられます。このヘレニズムとは、ギリシア・ローマの宗教的・思想的・芸術的伝統を指しますが、思想の構造からみると、アジアの伝統もこれに入ります。なお、ヘレニズム時代というときには、アレクサンドロスが活躍した紀元前四世紀から前一世紀までの約三百年間を指しています。

キリスト教が普及するにつれて、ヨーロッパでは、もともとあったヘレニズムの伝統と後から入ってきたヘブライズムの伝統の間

に緊張関係が生じ、その克服が課題となりました。その具体的展開は、時代によって、また地域によって、多様な形態をとりました。アンデルセンの故郷であるデンマークなどでは、初めに多神教的北欧的土着の伝統があり、次にカトリックの伝統が、さらにその上にプロテスタントの伝統が積み重なるという経過を辿りました。したがってそこには、宗教学でいう習合現象がみられ、無意識のレベルで、肉体と精神あるいは霊魂の二元論や、それを前提とした霊魂不滅説が広く受け入れられていたとしても、それほど驚くべきことではありません。

以上の意味で、「おばあさん」の解説は、かなり微妙なものであると言わなければなりません。やっかいなのは、この解説を前提にしないと、これから先の展開が不可能になってしまうことです。なぜならあの末娘の願いは、最終的に人間のもつ不死の魂を手に入れることであり、そのためには過酷な試練も引き受けなければならぬからです。

「おばあさん」は、その不滅の魂をえるための秘策について、こう語ります。

・「けれども、ただ一つ、こういうことがあるんだよ。人間のうちの誰かが、おまえを心から愛して、両親よりもおまえの方をい

としく思うならば、そして、真心と愛情とをすっかりおまえに注いで、やがて、神父さんをお願いして、その人の右手をお前の右手におきながら、この世でもあの世へ行つても、いつまでも変わらぬ真心と誓いとを立てさせてくださるならば、その時こそ、その人の魂がおまえの身体に移つて、「その人の魂が、あなたの身体に流れ込んでくるのよ」小学館訳、おまえも人間の幸福に与ることができるんだそうだよ。つまり、その人はおまえに魂を分けながら、自分の魂はそのままもっているというわけだね。けれども、そんなことは起こりやがないよ。なぜって、この海の底では美しいとされている、おまえのその魚の尻尾だつて、陸の上では、醜いものとされているんだからね。……（岩波訳）

この話を聞いて、美しい声をもつ人魚姫は、悩み抜いた末、海の魔女のところに行きました。そして、魔女の求めに応じて、彼女にとって最も大切な「美しい声」を代償に、つまり「舌」を切ってもらい、魔法の薬を手に入れました。今や、人魚姫は、激痛を覚えつつも、人間のように歩くことができるようになりました。

この先の展開は、よく知られているように、声を失つたために人魚姫の思いが伝わらず、まさしく悲劇になつて行きます。王子は、彼女を妹のように大切にしましたが、妻にするつもりはなく、自分が溺れて死にかかったときに助けてくれた娘を妻にする、と

心に決めていました。そしてとうとうこの娘と王子の結婚式のときがやってきます。このままでは、人魚姫は海の「泡」となつて消えて行くほかありません。

そのとき、人魚姫の姉妹たちが現れ、自分たちの美しい髪の毛を代償にして手に入れたナイフを彼女に渡します。もしもそのナイフを王子の心臓につき刺し、その血が彼女の足にかかるならば、もう一度人魚に戻ることもできるということです。ところが、人魚姫はそのナイフをしようと思わず、海に投げ捨て、船から海の中へ飛び込んでしまいます。自分の身体がとけて、泡になつて行くのが感じられました。

・そのとき、お日さまが海から昇りました。その光は、死のように冷たい海の泡を、おだやかに暖かく照らしました。人魚姫は少しも死んだような気がしませんでした。キラキラ光るお日さまの方を仰ぎますと、中空に、幾百となく、透き通つた美しいものが漂っていました。それを透かして、むこうに船の白い帆や空の赤い雲が見えました。その透き通つた美しいものたちの声は、そのまま美しい音楽でした。けれども、その清らかな音楽は、世界のものです、人間の耳には聞こえません。ちょうど人間の目が、その姿を見ることができないように、翼がなくても、空気のように軽い身体は、ひとりで空中に浮かんでいるのです。人魚姫

は、自分の身体も同じように軽くなって、《泡》の中から抜け出て、だんだん上の方へ昇って行くのに気がつきました。」

「わたしはどこへ行くのでしょうか？」

「空気の娘たちのところへですよ！」

「人魚の娘には、不死の魂というものはありません。人間の愛をえなければ、決してそれをもつことはできないのです。ですから、永遠の命を授かるうと思うならば、他のものの力に、頼らなければならぬのです。わたしたち空気の娘も、やはり不死の魂をもっていません。けれども、善い行いをすると、それが授かるのです。……こういうふうにして、三百年の間、わたしたちにできるだけの、善いことをするように努めますと、ついに不死の魂を授かって、人間の永遠の幸福に与ることができるのです。可愛そうな人魚姫さん、あなたも、わたしたちと同じように、真心を尽くして、お努めになりましたのね！ そして、いぶん苦しんだり、辛抱なざつたりして、いま、空気の精の世界へ昇っていらっしやったのですよ。これから善い行いをなされば、三百年の後は、不死の魂があなたにも授かりますよ」(岩波訳)。人魚姫は、透き通った両腕をお日さまの方へ高く上げました。その時はじめて姫は涙というものを感じました。

この後にもう少し話が続くのですが、ひとまずこれまでの展開

を振り返っておきましょう。ここに描かれているのは、異界に住む人魚姫が、人間の側の真の愛によってその境界線を乗り越える可能性があることを知り、それに自らの命を賭けたこと、しかしその賭けに失敗し、やり直すチャンスがあるにもかかわらず、相手に対する愛のゆえにそれを放棄したこと、そして最後に、泡として消えるはずの運命から空気の精の世界へと引き上げられたこととです。しかもその先には、あの不死の魂を獲得する可能性が残されているというのです。

ここで、宗教の視点からまず問わなければならないのは、二つの世界の間にある境界線のもつ性質です。先に言及したヘレニズムの思想においては、それは二つの世界を明確に区別するものであっても、なんらかの方法で二つの世界を行ったり来たりすることができるとされています。ここには、二つの世界に住むものは究極的に「同質である」との前提があります。ところがヘブライズムの思想では、創造者なる神と被造物は根源的に異質なものであるとされており、創造者の意志はその自己啓示という形式によつてのみ被造物に示されます。したがってその境界線の扱いは、旧約聖書の預言者の場合のように、神の側からその意志が示され、預言者はそれを預かるという形を取ります。これに対し同じく旧約聖書の詩篇は、人間の側のあらゆる思いをありのままに神にぶつけていますが、この場合でさえ、神の自己啓示が前提とされて

います。

ある思想がヘブライズムに属するのか、それともヘレニズムに属するのか、これを比較的簡単に見分ける方法があります。それは、次のように問うことです。つまり、ここでは、人間が究極的に神や仏になる可能性があるのかどうかを問うのです。生前であれば、死後であれば、もしも人間が神や仏になることができると考えられているとすれば、それはヘレニズムに属します。では、例えば(24「天使」を参照)、子どもが死んで天使になるという素朴な信仰の場合はどうでしょうか。これに対する答えは、その天使をどのような存在と理解するかによって異なってきます。もしもその天使が究極的に神と同質の存在であると考えられているとすれば、それはヘレニズムの思想に入ります。しかしもしもその天使が神の被造物であるとみなされるとすれば、それはヘブライズムの思想に属します。

童話には、天使の他に、妖精や植物の精なども登場します。これはどう考えたらよいのでしょうか。たしかにこれも、天使の場合と同じく、その被造性を問うことよって見分けることができますが、実際にはなかなか微妙な問題になります。というのは、妖精や精霊といった発想は、もともとアニミズムを背景として成り立っているからです。宗教の歴史を遡ると、最終的には、必ずといってよいほどアニミズムの世界に行き着きます。一般にアニミ

ズムとは、すべてのものの内に命が宿っているとみなす信仰であり、それは、花や木だけでなく石にも命が宿っていると考えます。すべてのものに命があるとするとすれば、人間同士の間だけでなく、植物同士の間でも、動物同士の間でも、人間とそれらの存在との間でも、会話が可能になります。さらには人間と月や星との間でも、コミュニケーションが可能になります。したがって、妖精や精霊の存在とその対話能力に対する信仰は、アニミズムの世界観に根ざしていると考えられます。

しかもこのアニミズムは、決して単なる過去の遺物ではありません。現在もまた、特に日本人の間では、子どもの内にも、大人の内にも生きています。子どもが妖精や精霊の存在を受け入れ、アニメや漫画の、怪物やロボットに共感することができる事実は、そもそも人間の成長段階の中に、アニミズムの心性がたしかに生きてくる時期があることを示唆しています。大人になり、主観と客観を明確に区別することができるようになって、その感覚はその人のうちに生き続けています。ここに「大人の童話」と言われるものが存在できる理由があります。

筆者はさらに、次のような仮説を立てています。つまり理性といわれる人間の能力も、実は、このアニミズムの感覚を前提として初めて成り立つのではないかと疑っています。理性の生み出し

た成果のひとつが自然科学であるとすれば、変化する諸現象の中に変化しないものを探究する精神、それが理性であることになり
ます。それは、主観も客観も、すべてのものが同質であるという
ことを前提にしています。本当に異質なものは、理解の対象にな
らないからです。さらにその目を理性自身に向けて、理性も物質
であるとの答えが出されても、何ら驚くことはありません。アニ
ミズムも唯物論も、すべてのものの同質性を前提としているかぎ
りで、同じレベルにあります。両者のちがいは、唯物論がその同
質性を物質に求めるのに対し、アニミズムはその同質性を命に求
めていることだけです。後者は、今日では「霊性」などと呼ばれ
ています。したがって、理性はアニミズム的心性を前提としてい
る可能性が強く疑われるのです。

一般に、理性は、各個の個性を無視して共通性を追求する冷た
い精神であると言われています。しかし理性は、元来、木や石や
星と言葉を交わす暖かい精神（コミュニケーション能力）をもつ
ているはずですが、それが冷たくなったのは、その探究のプロセ
スと成果を専ら人間の繁栄のための手段として位置づけたからで
す。つまり人間を例外的存在とみなし、相手との対話を打ち切り、
相手を単なる目的の手段、技術の対象としたからです。

アンデルセンの童話の解説が、かなりこみいった話になってし

まいました。ここでもう一度、わたしたちの童話に戻り、いくつ

かの疑問を箇条書きにしておきましょう。①人間には不死の魂
があるのに、人魚にはそれが無い、ということが前提とされてい
ます。しかし人間を特別視するこのような発想は、どこから生ま
れてきたのでしょうか。また、人間には涙があるのに、人魚には
ない、と言われています。これは何を意味するのでしょうか。ア
ンデルセンの童話における「涙」のもつ意味を、改めて問う必要
があります。②人魚姫が空気の精の世界に近づきながら、不死
の魂をえるにはさらに三百年の努力が必要であるとの結論は、中
世のカトリック教で展開された煉獄の思想ないし天使のヒエラル
キーを思い起こさせます。これは筆者の思い過ごしでしょうか。
つまりこの箇所では、人間ではなく、空気の精のヒエラルキーが
イメージされているような気がします。この物語の最後に、「お
行儀」の良い子と悪い子の話があり、彼らの行為が、空気の精が
「神さまの国」に昇って行くまでの期間に影響を与えるとされて
います。これは、煉獄思想において、死者が一日も早く煉獄から
天国に向かうことができるようにと、生者がさまざまな功徳を積む
姿と重なってきます。③アンデルセンの時代のデンマークは、
戦争に負け、国力が弱り、思想的には後期ロマン主義へと移行し、
教会の力も後退しつつありました。そのキリスト教の中で最も影
響力をもっていたのはルター派であり、彼らは煉獄の思想も天使

のヒエラルキーも退けました。このような状況の中で、アンデルセンの作品は物議を醸さなかったのでしょうか。「童話だから」ということで片づけられたのでしょうか。

宗教改革者ルターが強調したのは、行為の重視に対する「信仰のみ」、伝統や伝承の尊重に対する「聖書のみ」、そして聖職者のヒエラルキーの墨守に対する「万人祭司」という主張でした。この「信仰のみ」は、個人の発見という視点から、専ら主観を強調したものと高く評価されることがありますが、このような解釈は必ずしも射ていません。というのは「信仰のみ」は、「神の恵みのみ」という他力信仰を前提としているからです。それゆえ、自力信仰に基づく煉獄の思想は退けられたのです。他力信仰を前提としつつ、どのようにして自力的要素を育成することができるのかという問題は、プロテスタントに共通の教育課題です。ルター派では、少なくとも大人を相手にする場合には、「義人にして同時に罪人」ということが強調されました。しかしこの論理は子供には通じません。子どもの健全な成長には、まず自ら努力する意欲と体験が必要だからです。煉獄の思想を退けつつ、「努力することの必要性和大切さ」をどのようにして教えるのか。これは、プロテスタントの教育が取り組むべき基本的課題です。キリスト教教育は、子どもの自律を目指しつつ、同時に自律には限

界があることを指摘しなければなりません。神学者テイリツヒの用語法を用いるならば、キリスト教教育は、他律と自律の矛盾から神律へと引き上げられるプロセスを明らかにしなければなりません。このプロセスの中で、「教材としての童話」はどのような位置を占めるのか。これを問うことが、本論の背景にある筆者の基本的関心です。

したがってアンデルセンの童話も、その中に現れる他力的要素と自律的要素の関係に着目しつつ読む必要があります。アンデルセンの童話の場合、他力的要素は、たしかに自然的啓示の系譜に属していますが、「お日さま」の役割に現れています。人魚姫の物語においても、「お日さまが海から昇る」と、泡となって消えるはずの人魚姫が空気の精の世界に昇って行きます。ルター派においては、この他力的要素はアガペーの愛として捉えられ、それは、エゴイズムを前提とするエロースと明確に区別されました。では、この人魚姫の愛は、単なるエロースだったのでしょうか。再び人魚に戻ることを自ら捨てた愛は、何と呼べばよいのでしょうか。それは余りに切ないと言うだけでなく、間接的にアガペーを指差しているのでしょうか。それとも……

・9 「最後の日に」

この話は「生きとし生けるもの日々のうちで、一番神聖な日は、私たちが死ぬその日であります。それは最後の日です。神聖な、そして大きな変化の日です。必ずやってくる重大なこの世の終りの日のことを、あなたは本当に真剣に考えたことがありますか」(以下、岩波訳)と語り始めます。そしてまず、ある厳格な信仰に生きた男のもとに死神が現れ、一緒に天国の門の前に行くまでの出来事が描写されます。それは、その男が自分の人生全体を振り返るときであり、死神はこう言います。人生とは、「何か見られたくないもの」を注意深く隠しつつ、この動物的なものを互いに暴こうとしている仮装舞踏会のようなものだ、と。この男も、自らのかつての悪い思いや欲望の事実を突きつけられます。すると彼の魂は、たしかに自分の内に何もよいものは住んでいないが、悪事は働かなかつたと弁明し、こう強調します。「私は律法と福音を守ってきました。私は自分でできるだけのことをしてきました。私は他の人たちとはちがいます!」と。

やがて天国の門の前になると、入り口の番をしていた天使が男に彼の信仰と、それを表す行為について説明するように促します。そこで、彼は答えます。

「私はすべての戒律を厳格に守りました。私は世間の人の前へりくどりました。私は永遠の破滅の大道を行く悪と悪人を憎み、

またそれを責めました。」

「では、おまえはマホメット信者のひとりだね!」

「いいえ、キリスト教徒です!」

「お前の信仰と、お前の行いのうちには、キリスト教徒らしさが認められない。キリストの教えは、和解と、愛と、恩寵(めぐみ) 小学館訳)である!」。

・ そのとき「恩寵(めぐみ) ー」という声が響き、天国の門が開かれ、魂は、そこに開かれた栄光に向かって飛んで行きました。中から射してくる光は、すべてのものを突き通すような強い光であると同時に、楽の音と共に魂のすみずみまで染み通る明るい光でした。「この時はじめて、魂は、今まで一度も感じたことのない重荷を感じました。それは自分の傲慢と、冷酷と、罪の重荷でした。—— そのことの中ではつきりました」。そして魂は言いました。

「私が生きているときにした善いことは、それより他に仕方なくしたことです。けれども悪いことは—— 私の心から生まれたものです!」

ここで問われているのは、天国とはどういうところかということであり、そこに入るのは誰かということ。アンデルセンの

理解によると、キリストの教えの中心は「和解と、愛と、恩寵（「めぐみ」）にあります。この「和解と、愛と、恩寵（「めぐみ」）」は、福音とも呼ばれてきました。それは、神の側から一方的に救いの手が差し伸べられ、人間が神の世界に近づく道が開かれたことを意味します。それは神の側の一方的な働きであり、この意味で他力的な出来事です。ところが人は、真面目であればあるほど、その恵みに与りつつも、ルールを厳格に守ることにとられ、それを守ることができない者を批判し、排除するようになります。その結果、福音という他力も、いつの間にか努力という自力に飲み込まれてしまう危険性が増して行きます。

しかしこの話によると、この自力的信仰に陥ってしまったはずの魂も、天国の門をくぐることを許されています。天国の光の二つの働きにより、その魂は自らの間違いに気づきます。ひとつは、すべてのものを暴露せずにおかない力であり、暗闇に生きる者にとつて恐るべき力です。その光に射られた者は「力なく小さくなつて深く沈んで行く」経験をします。もうひとつは、それにもかかわらず、冷たい者のうちに染み入つて暖め、生きる希望を与える力です。アンデルセンはこの恩寵を「神の愛」と呼び、天国は、その神の愛が「絶えることなくこんこんと流れる」ところであると説明しています。

そしてこの話の結びは、こうなっています。

・「人間の魂よ！ 神聖に、莊嚴にそして愛に満ちた永遠の魂であれ！」
こういう歌声が響きわたりました。わたしたちはすべて、この世の生活の最後の日に、この魂のように天国の栄光と崇高とを仰いで、思わず身ぶるいして後ずさりすることでしょう。わたしたちは深く頭をたれて、へりくだった心を抱いて沈む（ぬかずく）
（小学館訳）
ことでしょう。やがて、神の愛と恩寵とに助け起こされて、立ち上がり、新しい道をただよいながら、より善くより気高く清められつつ、ますます光明の莊嚴（光の素晴らしいさ）
（小学館訳）
に近づいて行くのです。こうして、その光明に力づけられて、永遠の明澄の境（「永遠の光明の中」
小学館訳）に昇って行くことができるのです。

「神の愛と恩寵とに助け起こされて、立ち上がり、新しい道をただよいながら、より善くより気高く清められつつ、ますます光明の莊嚴に近づいて行くのです。」この描写も天国の門の内側の描写であるとすれば、そこに入る魂は、必ずしもあらかじめ完全無欠である必要はありません。恩寵の光に照らされ、罪を暴かれながらも、同じ光に助け起こされて、立ち上がり、その中へと入って行くことができます。身体と魂を分離することができると考えている点で、たしかにアンデルセンの理解は伝統的キリスト教から離れていますが、律法と福音の関係をめぐる議論においては、

興味深い位置にいます。律法から福音へという伝統的秩序を重視する立場よりも、福音から律法へという秩序を優先しているようにみえるからです。これこそが、二十世紀前半の神学において最も激しく論じられた問題でした。

・57 「世界で一番美しいばらの花」

この話は、ある国の女王が病気になるって死にかかったとき、女王の大好きなバラの花を、「世界で一番美しいバラの花」をみるならば、女王はきつと助かるにちがいない、という医者言葉で始まります。世界各地から、由緒ある様々なバラが寄せられましたが、それは「この上なく高い清らかな愛の現れ」とは言えませんでした。このバラを象徴的に理解し、それは幼子のほほに咲く赤いバラであるとか、それは聖餐台の前で洗礼の誓いを述べる若い娘の心に咲く清いバラであると解する者もいましたが、いずれも探し求めている花ではありませんでした。

話の最後に登場するのが、女王の小さな男の子です。彼は聖書を開いてイエス・キリストの生涯をたどり、十字架に掛けられる場面で「これより大きな愛はない」という聖句を読みました。アンデルセンは、このキリストについて「世の人びとを、いえ、まだ生まれてこない後の世の人々をも、救うためにすすんで十字架におかかりになった主」(岩波訳)と説明しています。

王子の朗読を聞きながら、女王はこの聖句から「世界一美しいバラの花」が咲き出るのをみました。それは、「十字架の上に流されたキリストの血の中から咲きでた、あのバラの花の姿でした」(岩波訳)。

アンデルセンの童話の中で、直接、イエス・キリストの「十字架」について語っているものはわずかであり、この話は、その中のひとつです。では、イエス・キリストの復活についてはどうでしょうか？

・78 「ユダヤ人のむすめ」

これは、ユダヤ人の家に生まれ、小さいときに母親を亡くしたサラという女の子の話です。彼女の母親は、「自分たちの子どもには、決してキリスト教の洗礼を受けさせないでほしい」という遺言を残しました。そのため父親は、子どもを貧民学校に通わせるときも、キリスト教の信仰を教えないように学校側に要請しました。宗教の時間になると、学校側は彼女のために特別な配慮をしました。しかし彼女がその学び関心をもっていることが分かったと、教師たちは父親にその事実を伝えました。結局、父親は、妻の遺言を守るために、学校に通うことをあきらめさせました。

数年後、サラは、キリスト教徒の主人のところへ働いていまし

た。彼女にとって大切なのは旧約聖書であり、特に、「安息日を覚えて、これを聖とせよ！」と「父と母をうやまえ！」という戒めでした。しかしキリスト教徒の家では、ユダヤ教の安息日である土曜日も休めず、「心の中で」その戒めを守ることにしました。また、決して新約聖書を読んだりしませんでした。その内容は、聞いてよく知っていました。

ある晩、主人がハンガリーの騎士物語を朗読しているのを耳にしました。それは、トルコの高官に捉えられた騎士が、途方もなく高額な身代金を支払って解放された後、今度は、その高官が逆につかまえられたという話でした。この高官は、「これはキリスト教徒の仕返しだ！」と言うと、騎士はこう答えました。「キリスト教はわれわれに、われわれの敵をゆるし、われわれの隣人を愛せよ、と命じている。神は愛だ！ 無事に故郷に、家族のもとに帰りなさい。そして、苦しんでいる者に対し、やさしく親切にしてやりなさい！」と。すると、この捕虜はすでに毒を飲んでいましたが、その毒が全身にまわる間に、「その教えの中で死なせてください！ キリスト教徒として死なせてください！」と頼みました。そしてこの願いはかなえられました。

さらに数年後、この家の主人が亡くなり、奥さまが病気になるでも、誰も世話するひとがいませんでした。そこでサラはその役割を引き受け、寝ずの番で看病しました。この病人の願いに応じ

て、聖書を読んであげました。そうする中で、彼女は次のことを知り、そして受け入れました。つまりこの世では、ユダヤ教はキリスト教から区別されているにもかかわらず、あの世では、神における大きな一致のうちにあること、神は死を越えて、わたしたちを導いてくださること、神はこの地を訪れ、渇きの後に恵みを与えてくださること、そしてそれは、すでにキリストの中で起こっていることです。

神聖なその名を口にするに、「炎の洗礼が、肉体に耐えられないほど強く、全身を貫き流れました。娘のからだは、今まで看護していた病人よりも力がなくなつて、がっくりとくずおれてしまいました。「かわいそうなサラ！」とみんなは言いました。「この娘は仕事と看病とにからだを使いすぎたのだ」(岩波訳)。サラは施療院に運ばれ、そこで亡くなり、ユダヤ人の墓地に葬られました。

ヨーロッパのキリスト教にとってユダヤ人問題は、単なる民族問題や社会問題ではなく、その存在の根柢に関わる宗教問題です。特にアウシユビッツ以後のキリスト教は、この問題に真剣に関わってきました。では、一九世紀に生きたアンデルセンにとって、ユダヤ人はどのような存在だったのでしょうか。ユダヤ人を取り上げた作品がほとんどない中で、この話は、彼の思いを知ること

ができる貴重なものです。この作品におけるユダヤ教の取り扱いについて、今日の視点から様々な批判的見解もありますが、ここではむしろ、アンデルセンが「神は愛である」という観点からユダヤ人問題を捉えていることを確認しておくべきでしょう。そして多くの童話の中で、この愛が「お日さま」によって象徴的に表現されていることを踏まえて、その痕跡を探すと、やはり肝心なところにそれを見いだすことができます。例えば、この話の最後の場面は次のように描写されています。「キリスト教徒の墓を照らす神さまのお日さまは、へいの外のユダヤ人の娘の墓も照らしました。キリスト教徒の墓地に響き渡る讚美歌は、サラの墓の上にも響いて行きました。サラの墓にも「復活はキリストのうちにあります」というお告げが届きました。この主キリストは弟子たちに向かって言いました。「ヨハネは水で洗礼を受けたが、わたしはあなたがたに聖霊をもって洗礼を授けるであろう！」

・ 29 「雪の女王」

これは、童話というよりもその長さからみて物語とみなすことができる作品です。文庫本にして五七頁にも及び、七つの話から構成されています。この表題だけを見ると、「雪の女王」が大活躍するようなイメージを抱くかもしれませんが。しかし実際はそうではありません。「雪の女王」は第二話に登場するだけで、第六

話と第七話においても、主役というよりもむしろ脇役のような役割を演じています。しかしながら物語の最終テーマが、第七話にでてくる「永遠」という文字を完成させることにあるすれば、この課題を与えた雪の女王はやはり重要な存在です。まず、この雪の女王に関する描写を丁寧に跡づけてみましょう。第二話には次のように記されています。

・ 外では雪がちらほらと落ちていました。雪の粒の一番大きいのが一つ、植木鉢のふちにとまりました。雪の粒はだんだん大きくなって、しまいに、立派な女の人になりました。数百万の星くずでできているような、きれいな白いうす絹をまとっていました。女の人はほっそりときれいでしたが、氷で、さらさらとまぶしく光る氷でできていました。でも、生きていました。その目は、明るい二つの星のように、じっと見つめていましたが、その目には落ち着きも安らかさありませんでした。その女の人は窓に向かってうなずき、手招きをしました。

・ そうやって楽しく遊んでいると、大きなそりがやってきました。まっ白く塗られたそりに、誰かが、粗い白い毛皮のマントにくるまり、白い粗い毛の帽子をかぶって乗っていました。そりは広場の周りを二回まわりました。カイは自分の小さいそりをすばやく

そのそりに結びつけました。

・カイはすっかり怖くなり、主の祈りを唱えようと思いましたが、思いだすのは、大きな九九のかけ算表ばかりでした。……そりをあやつっていた人が立ち上がりました。その人の毛皮のマントも帽子も、すっかり雪でした。すらりと背の高い輝くばかりに白い女の人でした。それは雪の女王でした。……女王……はカイの額にキスしてやりました。ウワツツ！ 氷より冷たいキスでした。深く、心臓に染みわたりました。いいえ、カイの心臓はもう半分氷の塊でした。死ぬかと思うようでした！——でも、それはほんのちよつとの間のことで、すぐいい気持になりました。カイはもう周りの冷たさを少しも感じなくなりました。

・雪の女王はカイにもう一度キスをしました。すると、カイは小さいゲルダも、おばあさんも、家の者のことは、みんな忘れてしまいました。……カイは雪の女王をみつめました。たいへん美しく、これ以上賢く、立派な顔は考えられませんでした。窓の外に座って、カイに向かって手招きをしたときのように、氷でできているようには、今はみえませんでした。カイの目には、雪の女王は申し分ない人に見えて、もうちつとも怖くありませんでした。カイは雪の女王に、暗算ができること、しかも、分数の暗算だっ

てできること、国の広さの平方メートルや「人口はいくら」も知っていることを話しました。

第七話はこう描写しています。

・がらんとした、はてしない広間のまん中に、氷の張った湖がありました。……雪の女王さまは、うちにいるときはその湖のまん中に腰かけていました。そうしているとき、女王さまは自分は知恵の鏡に腰かけているのであって、これはこの世で一番立派な、二つとない鏡だと言いました。

・カイちゃんもさまざまの形を、そしてとても手のこんだ形を作りました。それは知恵の氷遊びでした。彼の目にはこの形はまったく見事で、この上なく意味深くみえました。それは、彼の目に刺さっていたガラスつぶのせいでした！ その形をすっかり並べると、書かれた言葉になりました。しかし、彼が作りたいと思っている言葉を、並べる方法をみつけることができませんでした。その言葉というのは、「永遠」というのです。雪の女王は前から言っていました。「その文字を作りだすことがきたら、お前を自由に上げてあげる。世界全体と新しいスケート靴を一足あげるよ」。そう言われても、カイちゃんはそれを作ることができません

んでした。「さあ、わたしは暖かい国々へ飛んでいくよ!」と、雪の女王は言いました。……「それ(噴火山)を少し白くしてやるう!それが必要なんだよ。そうすると、レモンやぶどうにいいんだよ!」そうやって、雪の女王は飛んで行きました。

以上のような描写から一体どんな女王像が浮かび上がってくるでしょうか。本当にひどい悪女でしょうか。実際に読み進めて行くと、二話から六話までは、友だちのカイを探しに出かけた少女ゲルダの冒険物語であり、それは、課題を克服するために必要な彼女自身の成長物語になっています。そのため、氷の女王の性格があまりはつきりしないままに、最終の第七話を迎えます。そして結びは、ゲルダの熱い涙が、カイの心臓の中に染み込んでいた氷の塊を解かし、その中にあった「鏡の小さい破片」もなくなり、それと同時に課題の文字作りも完成されるという筋書きになっています。もちろんカイは無事に解放されました。

この「鏡のかげら」がカイの心臓に入り、心臓がやがて氷のようになるであろうといわれる話は、第二話にでています。そしてそもそもこの鏡作りの話は、第一話のテーマとなっています。それによると、この鏡を作ったのは悪魔であり、それを持ちだして天使や神をからかおうとしたのは、この悪魔が開く「魔ものの学校」の生徒たちでした。しかし彼らは天国に向かって上昇する途

中でその鏡を落としてしまい、それは地面にぶつかり、粉々に砕けてしまいました。

この鏡には、すべてのものが歪んで映るといふ特別な性質があり、よいものや美しいものは醜くみえ、悪いところはいつそう強調されました。雪の女王がカイを誘惑して城に連れ帰ったのは、この鏡のかげらがカイの心臓に突き刺さった後でした。

ここで、どうもよく分からないのは、あの鏡の製作者である悪魔と女王の関係です。女王は悪魔の仲間なのでしょうか。手下なのでしょうか。それともたまたま下請けの役割を引き受けることになっただけのことなのでしょうか。彼女の城では、オーロラが規則正しく光っていたと説明されており、北欧の自然が背景となっていることは明らかです。たとえ極北の自然がどれほど厳しいものであれ、長年そこに住む者は、その自然を当然のこととして受け入れていたはずで、女王を単純に魔女とみなしていたとは考えられません。

ただし、「全世界と新しいスケート靴を一足あげる」という女王の言葉の中に、マタイ福音書四章八―九節に記されている悪魔の言葉と同種の意味内容を聞き取るならば、女王は魔女ということになります。それは次のような言葉です。「悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、「もし、ひれ伏してわたしを拜むなら、これをみんな与え

よう」と言った。

いずれにせよ、この女王と悪魔の関係の曖昧さが、多様な読み方を生みだすひとつの理由であり、この物語をもとに、デイズニーの「アナと雪の女王」のような作品が制作される理由です。なお、デイズニーのアニメに出てくる雪ダルマは、アンデルセンの童話「107・雪だるま」からヒントを得ていると考えられます。

第二話によると、「魔法の鏡」のかけらが心臓に刺さったカイは、九九ができたり、算数ができることを得意げに語り、女王はそれを喜んで聞いています。そして第七話では、雪の女王の腰にかけている椅子は「知恵の鏡」（「理知の鏡」岩波訳）と呼ばれています。ただしそこには「楽しさ」がありません。「笑ったり泣いたりすること」がありません。では、この「知恵」とは一体どのような「知恵」なのでしょう。感情的なものを排除していること、それが本当の知恵だと言うのでしょうか。さらに難しいのは、なぜ女王はカイに「永遠」という文字を作るように命じたかということ。この文字を作らだすことができたなら、解放してやる、と女王は言っています。この「永遠」と知恵はどのような関係にあるのでしょうか。「知恵の鏡」に腰かける女王は、当然この文字を作り出す力をもっていたのでしょうか。それとも……。女王と悪魔の関係をどのように捉えるかによって、その答えはちがってきます。

いずれにせよ、物語全体からみると、カイのみている現実には「魔法の鏡」に映った歪んだ現実ということになります。カイがこの歪んだ現実から解放したものは、それはゲルダの熱い涙でした。第六話のフィン人のおばあさんの言葉によると、この解放する力は、すでにゲルダの中に宿っていました。それは、「かわいい、むじゅきな子どもだった」からです。第七話においてこの事態は、「幼子のようにならなければ、神の国に入ることはいけません、うー」という聖句と、「バラの花、かおる谷間に、仰ぎまつる、幼子イエスキミ！」（岩波訳）という古い讃美歌の意味を体得したという話によって説明されています。この物語が始まったとき、カイとゲルダはまだ子どもであったはずですが、最後に自分の町に戻り、「戸口を通ったとき、二人は、自分たちが大人になっていたのに気づきました」。岩波訳ではこう結ばれています。「こうして、この二人は、子どものままの心を持った二人の、大人は、そこに腰かけていました。おりしも、時は夏、暖かい、恵み豊かな夏でした」と。したがってこの物語は、二人の成長物語として読むことが可能であり、その際、「真の知恵とは何か」「永遠とは何か」ということをめぐって、さまざまなドラマが起こりうるということを示唆しているのでしょうか。

それにしても、この物語の主人公は一体だれなのでしょう。雪の女王なのでしょうか。問題を起こした男の子カイなのでしょうか。

うか。それとも彼を助けようと、新しい世界に飛び込んで行ったら、彼女の冒険物語を成長物語として丁寧に跡づける必要がありますが、残念ながら紙幅の制約もあり、ここで筆を止めなければなりません。さらに、このアンデルセンの「雪の女王」とディズニー・アニメの「アナと雪の女王」を対比するという興味深いテーマも、今回は割愛せざるをえません。

・100 「砂丘の物語」

表題から分かるとおり、この作品は文庫本で五〇頁にも及ぶれつきとした物語です。貧しい漁師夫婦に育てられた主人公イェルゲンの生涯、次から次へとふりかかる過酷な運命が物語られ、読者は思わず、どうしてこれほど不運なの？と問わずにいられなくなりそうです。

父はスペイン王室に仕える貴族ないし高級官僚で、母は名望のある豊かな商人の娘でした。彼らは、結婚してまもなく、ロシアの宮廷に大使として派遣されることになり、この任につくために、ストックホルムへ向かう豪華な船に乗りました。しかし、その船は暴風で大波にさらわれて難破してしまい、スペインには「全員死亡」との連絡がありました。そのため、若夫婦の両親は彼らの孫が生き延びたことを知らず、この孫であるイェルゲン自身も自

らの素姓を知らぬままその生涯を閉じてしまっています。

難破船から救助されたのは、一人の女性と、生まれたばかりの男の子でした。この二人を引き取り介抱したのは貧しい漁師夫婦でした。しかし介抱のいかにもなく母親は亡くなり、赤ちゃんだけが残されました。漁師夫婦は、自分たちの子供を亡くしていたこともあり、この子を自分たちの子として育てることにしました。この子が主人公イェルゲンです。彼は、ユラン半島の大自然の中で育ち、毎年二回やってくる育ての母の弟の訪問を楽しみにしていました。このおじは北方に住む「うなぎ商人」で、いつもなぎにまつわる面白い話をしてくれたからです。その話にはユーモアがあふれ、外界には「悪い人間がたくさんいるよ！」という教えも含まれていました。

イェルゲンはまだ一四歳にもならなかったのですが、見ならぬ船員として雇われ、スペインにも行きました。そして束の間の上陸の際に大聖堂に入る機会がありました。この時の様子を、物語はこう記しています。

・イェルゲンは神々しい大聖堂のなかに立ちました。色どりの美しい絵が金色の地から光り輝いていました。幼子イエスを抱いた聖母が、花とろうそくにかこまれた祭壇の上に立っていました。祭服を着た司祭が式文を歌い、着飾ったかわいらしい合唱児童が

銀の香炉をふっていました。そのすばらしい美しい光景は、イエエルゲンの魂を貫き圧倒してしまいました。両親の教会と両親の信仰とにつつまれた少年の魂のなかには何か共鳴し、ふれあうものがありました。そのせいか、少年の目には涙がうかんできました。

(岩波訳)

この場面は、この物語に表れた宗教意識を考える上で大変重要な箇所です。というのは、物語の最終場面でこれとそっくりの、しかし微妙に異なる話が展開されるからです。この先、物語は彼の波乱万丈の生涯を描くわけですが、私たちはそれを飛び越えて、あらかじめこれに対応する箇所を読んでおきましょう。そこにはこう記されています。

・「ふるさとへ！ ふるさとへ帰ろう！」とイエエルゲンはいいました。誰も聞いている人はいませんでした。イエエルゲンは家を出て、砂丘へとやってきました。砂や小石が顔にぶつかり、まわりを渦をまいて舞い上がりました。イエエルゲンは教会に向かって歩いて行きました。砂は壁をうずめ、窓も半分かくれていましたが、正面の通路の砂は吹き飛ばされていました。会堂の扉には錠がおりしてなくて、押すとすぐ開きました。イエエルゲンは中に入って行きました。……誰の記憶にもないほどの台風、それこそ、恐ろ

しい神の怒りでした。けれども、イエエルゲンは神の家のなかに入りました。外は真つ暗な夜になりましたが、イエエルゲンのうちには明るい光がさしていました。それは、決して消えることのない魂の光でした。頭のなかにあつた重たい石が音が立てて砕け散るのが、彼にも感じられました。オルガンが鳴りひびいているようですが、それは、嵐と海鳴りのとどろきでした。イエエルゲンは座席に腰掛けました。すると、ろうそくがともされました。一本また一本と、数限りなく、ちょうどいつかスペインの国で見たのとそっくりでした。そして、昔の市長や参事会員たちの肖像がみな生き返って、今まで何百年と立ち続けていた壁のなかから出てきて、内陣のなかに席につきました。その時、会堂の扉や門が残らずひとりでに開いて、死んだ人たちがみな、その当時の盛装を凝らして入ってきました。そして、美しい音楽の鳴りひびくうちに、めいめいの席につきました。その時、まるで海鳴りのとどろくような讚美歌が起りました。ふと見ると、フスビユ砂丘の年をとつた育ての両親がそこにきていました。年寄りの商人のブレネ「ブレネ」さんと奥さんも、それから、二人のかたわらに、イエエルゲンに寄り添って、あのやさしい愛らしい娘さん「クララ」までがきていました。娘さんはイエエルゲンに手を差しのべました。そして、ふたりは、昔いっしょに膝まついた聖壇の前に行きました。牧師さんが二人の手を重ね合わせて、二人の愛の生活を祝福しま

した。(岩波訳)

ここに出てくる教会は、デンマークのスカーゲンの一番大きな教会で、「スコットランド人とオランダ人が数百年前に建てた」(岩波訳)もので、いくらかくずれかかっています。しかしこの教会の聖壇の絵には、「頭に金の冠をいただき、腕に幼子イエスを抱いた聖母マリアが、さながら生きてるように」描かれ、「壁の一番上には、スカーゲンの昔の町長たちや議員たちの肖像」が描かれ、説教壇は木彫で飾られていました。天上からは小さな船の模様が下がっており、「イエルゲンは、少年の頃スペインの立派な聖堂の中に立った時のように、神々しい純真な気持ちに打たれ」(岩波訳)しました。

スペインはカトリックの国なので、イエルゲンが旅先で訪れた大聖堂はカトリックの聖堂です。しかしブレネ夫妻とその娘クララと共に訪れたこの教会は、明らかにプロテスタントの教会です。イエルゲンがブレネ夫妻に出会い、仕事を与えられ、そして暖かく迎えられたのは、友人の死に関し無実の罪を着せられ、一年以上も牢獄に閉じ込められた後でした。獄中において彼は、なぜこのような目に会うのかと反問する中で、「きたるべき世」に行けば必ずその理由は判明するとの信仰に目覚め、暗闇と寒さに耐えました。しかしようやく人違いと分かり、解放されたもの

の、これからの生活について途方に暮れていたときに、彼に救いの手を差し伸べたのがブレネ夫妻でした。彼は一生懸命働き、日曜日ごとに教会に通いました。

そしてある春、イエルゲンは、ノルウエーのおぼさんのところで冬を過ごしたクララを迎え行くことになり、旅にでました。行きの航海は順調だったのですが、二人の乗った帰りの船は、故郷の港を目前にしながら大波に見舞われ、沈んでしまいました。イエルゲンはすぐれた泳ぎ手であったので、クララを抱きかかえ、どこにか岸に近づきました。しかし大波によって難破船の破片に打ちつけられ、彼は気を失ってしまいます。そこへ助けにきた船は、クララとイエルゲンを水中から引きあげ、岸に運びました。しかしクララは二度と息を吹き返すことなく、イエルゲンもなんとか助かりましたが、完全に記憶を失っていました。人々は彼を「哀れな白痴(ぬけがら)」のイエルゲン」と呼びました。その後、ブレネ夫妻は、娘を助けようとしたイエルゲンを自分たちの息子として受け入れ、一緒に暮らしました。

前段の引用の冒頭に出てくる「ふるさへ、ふるさとへ帰ろう!」という言葉を発したイエルゲンは、この「哀れな白痴(ぬけがら)」のイエルゲン」です。あのクララが亡くなってからすでにかなりの年月がたっていました。ブレネ夫妻はすでに子供たち

のそばで安らっている、と記されているからです。幻のクララが現れ、彼女と結婚式を挙げる場面、それがこの引用文の最後の部分です。そしてこの続きの部分には、次のように描かれています。天井からぶら下がっていた船が二人の上におりてきて、二人だけでなく、幻に表れた全員がそれに乗り込みました。そして「愛のなかへ！ 栄光の道へ！」「命はひとつとして失われず！」「喜ばしきかな、この幸！ ハレルヤ！」と讚美歌を歌いつつ、彼らは「海と空中を帆走し」て行きました。この讚美の歌がイエルゲンの最後の言葉となり、この歌と共に「不死の魂をつないでいたきずな」は切れました。

途中の波乱万丈の物語をまったく省略して紹介したため、話の筋がよく分からないと感じた方も多いはずです。紙幅の制約があるなかで、専ら宗教意識に焦点を合わせようとしたため、以上のような中途半端な形になってしまいました。全体に関するバランスのとれた解説は別の機会にゆずるほかありませんが、最後にもう一言だけ指摘しておかなければならない箇所があります。それは物語の最初の部分に出てくるイエルゲンの両親の会話です。

若い夫は言います。「でも、このとおり幸福にひたっているほかは、この世の命の後に第二の命や幸福の継続を求めるのは、高

慢で思い上がりだと感じ、そうだと悟るのだ。

若妻は言います。「ええ、私たちには与えられていますわ。」「でも、幾千人もの人にとつてこの人生が重い試練になりはしなかつたでしょうか！ 幾千人もの人がこの世界の貧乏と不名誉と病気と不幸の中に、いわば投げこまれはしなかつたでしょうか！ いえ、もしこの世の命の後に命がないとしたら、この世ではすべてがあまりに不公平に分けられていないでしょうか。そうだとしたら、神さまは正しい方ではないでしょう。」「天国には住まいがたくさんある、とキリストはおっしゃいました。」「神さまの愛がかぎりがないように、天国にもかぎりがないのです——動物も生き物です。どんな命だつてなくなってしまうことはなく、それ相応の幸福にあずかるだろう、と思いますわ。」

この会話には、正しい神が創造した世界の中になぜ悪があるのか、ということ論ずる神義論のテーマが含まれており、しかもそれは正義というよりも愛の視点から論じられています。これは、アンデルセンが神をなによりもまず愛として理解していることと関連しています。私たちの物語の主人公イエルゲンが、最後に、「愛の中へ！ 栄光へ！」という讚美歌を歌って亡くなることから、神は愛であると解されていることが分かります。ただし、この物語では、この神義論的テーマが「不死の魂」つまり「不滅の生」

と結びつけられて論じられているところにその特色があります。

この物語には二つの教会が登場します。アンデルセンは両者の違いをよく知りながら、双方の教会にあえて「聖母マリア」の画像を配置し、イエルゲンは、幼子イエスを抱くマリアを通して「子どものようにけがれない信心深い気持ち」をもったと描写しています。素朴に理解すると、この聖画を前にしたイエルゲンは、マリアに抱かれているイエスの位置に自分を置いており、イエスではなくマリアによって魂の再生を経験していることになります。このような理解は、本来カトリック教会の伝統であり、プロテスタントの伝統ではありません。先に、アンデルセンの童話では、女性が重要な役割をすることがあることを指摘しましたが、この傾向も彼のこのような宗教意識と関連しているのでしょうか。アンデルセンはこのことについて神学的議論をしていないためこれ以上の探究は無理ですが、この物語において、聖母が重要な役割を果たしていることはたしかです。

この物語は、最後の最後に、イエルゲンがそこで亡くなった教会は、結局、砂に埋もれ、誰もその中に入ることができず、塔だけが顔を出しており、それは墓の上の巨大な石碑のようにそびえ立っている、と結ばれています。もしも不死の魂が神のもとに帰ったとしたら、彼の亡骸とそれを収めた石棺にどんな意味があるのでしょうか。アンデルセンは不死の魂を説きながらも、身体にこ

だわる伝統的キリスト教の理解を捨てきれなかったために、このような記述になったのでしょうか。

第三章 小説と詩

1 小説家アンデルセン——『生きるべきか、死ぬべきか』

前章ではアンデルセンの「童話」を取り上げ、その宗教意識を考察しました。本章では、まず、小説『生きるべきか、死ぬべきか』（鈴木徹郎訳、東京書籍）の中で論じられている宗教問題に焦点を合わせ、その概略を紹介します。これにより、「童話」に表れた宗教意識の背後にある、アンデルセンの抱えていた宗教問題の一端が浮かび上がってくるからです。彼が『即興詩人』『O・T——苦悩の烙印』『ただのヴァイオリン弾き』『二人の男爵夫人』といった長編小説を書いたことは、年譜に記したとおりですが、これらの作品の中で宗教問題を直接扱ったことはほとんどありませんでした。ところが一八五七年五月に出版された第五番目の長編小説『生きるべきか、死ぬべきか』は、まさに主人公ニールスの宗教意識の変化とその養父ヤベトウス・モラウブによって代表される伝統的宗教観との相克を中心テーマとしています。この葛藤を乗り越える機会が、いつ、どのようにして通してやってきたのでしょうか。早速、その内容に入ってみましょう。

この小説は三部から構成されています。

第一部は、母を病気で亡くし、その後さらに父を事故で亡くした貧しい男の子ニールスと、ユトランドのシルケボーからたまたまコペンハーゲンにきていた老牧師ヤベトウス・モラウプが出会い、老牧師がこの男の子を自宅に引き取る決心をする場面から始まり、老牧師にはボーディルという娘がおり、彼女が男の子の面倒をみるようになります。

ニールスはこの老牧師一家に守られ、素朴な信仰と知的教養を身につけ、やがて家族の期待を一身に帯びて、牧師になるために、コペンハーゲン大学に入学します。しかし彼はそこで様ざまな知識を学ぶうちに、聖書や信仰に関する伝統的理解に満足できなくなり、牧師になることに迷いを感じ始めます。第一部は、そのような悩みを抱えて帰郷したニールスが、彼のために生活の面で、信仰の面で、そして学業の面で支えてくれた老牧師およびその娘と対決するところで終わっています。

この作品は小説ですので、その他、重要な脇役がたくさん登場し、それぞれの役割を果たしていますが、今回は、それらの配置や性格づけの問題の関する議論は一切省略しています。したがってこの概略は小説全体の概略というよりも、わたしたちの問題関心に引き寄せて紹介したものです。機会があれば、是非、手にとっ

て読むことをお勧めします。きっと「童話のアンデルセン」とはちがった印象を受けるはずです。

全体のイメージをつかむうえで参考になると思われる個所を引用しておきますので、読んでみてください。

・一家の蔵書と云ったら、母親の持っている聖書と、昔の幻想物語の本（エーベンチア）『千夜一夜物語』の二冊しかなかった。この本は母親の贈り物で、ニールスのものだった。二冊とも繰り返し読まれ、ニールスはこの二つの本にすっかり精通していた。二冊の本の内容は対照的なまでに違っていたが、子ども心にはいずれ劣らぬ真実の書だった。……ニールスがアラジンになりたいと思ひ詰めていたか、望んでいたか、それはなんともいえない。だが、彼が子ども時代に見た夢で、のちに成人してから重要な意味を持つようになった夢が一つあった。つまり、ある夜のこと、ニールスは何千という宝物や果物が目もくらむばかりに光輝いている洞穴に下りていった夢を見たのである。彼はそこで魔法のランプを見つけて手に入れ、家に持ち帰ってみると、それは——母親の古めかしい聖書だったのである。（三一頁）

・ニールスはこの土地へ移ってくるまでに聖書のほとんど全部を、『千夜一夜』の物語はすっかり読破していた。（七一頁）

・彼（ニールス）は熱心に勉強し、せっせと大学に通った。特に彼の興味を引きつけたのは哲学と天文学の講義だった。それらの講義は、……思考の世界の巨大な富のありかを指してくれるような気がした。（九六頁）

・（姉）「不滅の生は魂に与えられているわ。宗教のおかげで、聖書のおかげで永遠に生きられるんだわ」。（弟）「それを確信しているの」。（姉）「疑ったことなんてないわ。私、死んでから再びよみがえることを確信しているわ！」（弟）「なにになってだろう。それが問題だよ。この世ではすべてのものがいったん土に返り、再び姿を変えて生まれてくる。だが、それは姉さんが考えているのとは違う。果てしない生命の循環とでも表現すべきものなのだ。化学はすべてのものと同じ物質がいろいろと含まれていることを明らかにしている。そしてその組み合わせいかによっていろいろな力となって現れ、石になるものもあれば植物になるものも動物になるものもあるんだ。そして、その組み合わせがこの世で持続できる限界に達すると、解体してもとの物質に戻るんだよ」。

……（弟）「ほんとうは、永遠に生きようなんて私たちが思うのは思いうがりがりも甚だしいんだよ。しかも心も意識も備えたままね」。（一三四頁以下）

・（老牧師）「私には、お前が昔流の信仰や考え方から抜け出し、新しい流れにさらわれたのがよくわかった。……ニールス、お前は思いうがりがった理性に毒されてしまったんだよ。この青二歳めが！」「聖書のなかにどれほど私たちの富の宝があるか、よくはどわかつている人間は一人もいないはずですよ」と、息子は答えた。「聖書のなかにはあらゆる時代、あらゆる人間のための思想が蔵されており、それがはつきりと直截に表現されています。それこそはつまり、生命の詩です」。「詩だって！」と老牧師は叫んだ。「詩といったって、響きのよい鈴のようなことばという意味で言っているんじゃないですね。歓喜のなかで、おびえわななくなかで胸を打つ心の鼓動を詩と言っているんですよ！」（老牧師）「新約聖書のことばは一つとしてわれらが主のみことばでないものはないということ疑っているのかね。——〈聖書は神の息吹を受けた全き書〉なんだぞ！」（ニールス）「キリストご自身はなに一つ書き記されず、すべてはみ弟子を通して語られているものですね。……」（二六一頁以下）

・今は一八四四年だった。（二六七頁）

第二部は、コペンハーゲンに戻ったニールスが、老牧師に宛てて、これまでの養育に対する心からの感謝と、良心に従って判断

した結果、やはり神学の道へ進めなくなった旨の手紙を書く場面から始まります。しかしもし牧師にならないとしたら、何になるのでしょうか。最終的に彼は、「床屋医者にならねばいい」という養父の皮肉を自己流に解釈し、医師になろうと考えました。なぜなら、医師は信仰を行為で示すことができるからです。そして生活費は、すでに得ていた家庭教師の仕事でなんとか乗り切れるはずでした。

教える相手は、学友のユリュウス・アロンズです。彼は、卸商を営むユダヤ人の金持ちの息子で、父親がニールズに、卒業するまで息子の学習の面倒をみてるように依頼したのでした。彼には三人の姉妹があり、ニールズはあたかもアロンズ家の一員のように暖かく迎えられました。末の妹エスターは一七歳になったばかりでしたが、新約聖書だけでなくゲーテの『ファウスト』も読んでおり、彼女の解釈にニールズは驚きました。この時点でのニールズの気持ちをアンデルセンはこう記しています。「母とボーディル——そうだ、この二人は彼の人生行路に影響を及ぼしたすばらしい女性たちのすべてだった。小さなユダヤ娘のエスター、——彼女が彼の関心をそそる女性として登場してきたが、まだまだつぼみの花だ。そのつぼみは、いつ、どのように花開いていくのだろうか」(二二四頁)と。

第二部の後半は、一八四八年に勃発した第一次ドイツ・デンマー

ク戦争以後の危機的状況を背景とした「戦場で」の話となっています。この時点でのユリュウス・アロンズとニールズについて、物語はこう記しています。「シユレスヴィー市に一番乗りをしたデンマーク軍の部隊のなかに、われらが二人の友人、下士官ユリュウス・アロンズと軍医下士官ニールズ・ブリーデもまじっていた」(二四〇頁)と。周知のとおり、この戦争は最終的にデンマークの敗北に終わりますが、ユリュウス・アロンズは連日連夜の過重な労働で病気になる、野戦病院に収容されました。しかし彼はチフスにかかっており、まもなく危篤状態に陥りました。そこへ、知らせを受けたニールズが馬で駆けつけ、臨終の床に立ちあいます。ニールズが来たと分かると、病人は、「死後の命はあると思うかい」と繰り返し尋ねました。「クリスチャンはあると信じているよ」と答えると、「そうなんだ、エスターもそう言っている」(二五〇頁)といって息を引き取りました。

小説では、このときのニールズの戸惑いをこう描いています。「彼自身はそうした命があることを信じてはいなかった」、「彼は答えなかった。彼にはその問いは苦痛だった。自分の信念にもとる返事はできなかったし、ここで今、「いや、そんなものは信じないよ」と言うこともできなかった」(二五〇頁)。

この後、ニールズも白兵戦に巻き込まれ、瀕死の重傷を負い、半死半生の状態で、死とは何か、生とは何か、を考えました。「音

が空気の振動によって生まれるように、すべての思考、気分、感情は脳の働きによって生まれるのさ。肉体が減れば、そういう機能も、つまり、魂も完全に〈存在〉を停止するんだよ。な、ほくらが不滅の部分と呼んでいるものも、それだけのものさ。」(二五五頁)、「人間は自然の産物であり、生命の循環のなかにあってやがて消滅する、瞬間的産物である」(二五六頁)と。しかしそう思いながらも、彼はこの答えに満足できませんでした。全存在が苦痛となり、お前は消滅してしまうーという恐れが襲ってきたからです。

無に帰してしまうのではないかという全身を貫く恐怖のどん底で、彼に光をもたらしたのは、彼を探し求めていた愛犬ヴァプスでした。アンデルセンはこの場面をこう描写しています。「神とも縁が切れた人間である彼のそばに、彼が愛するものうちで最も卑しい位置を占めるもの、動物がやって来て、慰めをもたらした」(二五八頁)と。そしてニールスの頭に最後に浮かんだのは、「死に臨んで子どものような信仰を持っている者は幸いだ。ぼくは持っているない！——わかっている！——わかっているんだよ！——という思い」(二六〇頁)でした。

第三部は、戦死したと思われるニールスが、生きていたことを知り、喜びに沸く家族の様子から始まり、やがて学友であり

戦友であった亡きユリュウス・アロンスの家族に迎えられ、末娘エスターと「永遠の命」について議論する場面が続きます。その議論のなかで興味深いのは、ユダヤ教の伝統のうちに育ちながら新約聖書を「神の啓示」(二九〇頁)と認め、「神の愛」と「神の義」を強調するエスターと、あの瀕死の経験にもかかわらず、相変わらずフォイエルバッハ流に信仰を幻想ととらえているニールスの対比です。ニールスの無信仰ないし不信仰に対する信仰の立場を、アンデルセンはなぜユダヤ人の娘エスターに振り分けたのでしょうか。これは、アンデルセンの宗教意識を考える上で、見逃すことのできない問題です。

わたしたちのこの問いを意識しているかのごとく、この先、物語は、「ニールスがコペンハーゲンに帰ってくると、ちょうどその前の日、エスターがキリスト教に帰依するために洗礼を受けた」ということを聞いた。受洗は彼女のたつての望みだった」(三〇六頁)と急展開をみせます。そしてこの出来事がニールスのこれまでの確信をゆるがし、「神や永遠の生を求める気持ち」(二二〇七頁)を引き起します。今や、ニールスが相手としているのは、ユダヤ教徒ではなくユダヤ人キリスト教徒です。彼は、これまで自分の主張を支えてきた書物を読み返し、今や、それをそのまま受け入れられなくなっている自分に気づきます。ただしこの時点ではまだ、「不滅の生」に対する確信をもつことはできませんでした。

この彼の迷える心をさらに揺さぶったのは、一八五三年の夏、コペンハーゲンを襲ったコレラの流行と、その過酷な状況でも誠実に働き、疲労困憊したニールスに差しのべられたアロンス家の援助から始まった交流でした。末娘エスターとニールスの対話は、専ら人間の「知識」と「信仰」の関係を巡るものでしたが、エスターも今や「変革の時代」(二三三四頁)であることを認めています。そしてこの科学を受け入れる姿勢——「科学に対する心からの愛と尊敬」(二三三八頁)——は、理性を重んずるニールスに、さらに彼女との心の交流を求める思いを与え、やがてその思いは彼女への恋心となって行きました。

コペンハーゲンに戻ったニールスは、再び、病人たちの世話に追われていましたが、エスターが病気であるとの知らせを受け、その病床に駆けつけました。しかし彼女は、「死は生です」という本来にわずかの言葉を残して亡くなってしまいました。ニールスは彼女の死を受け入れられず、「信仰は与えられるもので、考えて得られるものではない」(三三五一頁)とするエスターの抱いていた信仰にも抵抗を覚え、もがき苦しみます。しかしやがて「童心に帰り、両手を組み合わせ」「神よ、わが神よ、信仰を与えたまえ！」(三三五二頁)と祈りました。「その祈りには悩みと試練に打ちひしがれた心の奥底から絞り出された熱意がこもって」おり、「涙がほおを伝わって流れ、——胸に光がさして」(同)きました。

ニールスの葛藤に言及している箇所と、それを乗り越えた境地を語っている箇所を引用しておきますので、ゆっくり読んでみてください。

・人間の魂には、永生のわが家を志向する衝動、本能、憧憬というさらに強力なものがある。ニールスはそのことを確信したと
思った。ところが、再び迷いが生じた。——身を焦がすような、この上なく強い力でのしかかってくる疑惑、これがわいてくる瞬間はたまらないほど苦しかった。人間にとってこれ以上はないと思えるような苦痛で、——いっそのこと、この世に生れなかったほうがよかったとさえ思えた！(三四八頁)

・エスター、神の前ではニールスの花嫁であるエスター！この上なく清純な恋心を寄せながら、ニールスは彼女の面影を追った。彼女はこの世にあってニールスの光、導き手となるように、彼の人生行路に送り込まれてきたのだ。私たちに起きることは、すべて私たちにとって最善のことなのだ！重くのしかかるもの一つ一つが精神を成長させるのだ、重しが(へしゆる)の木を成長させるように。ニールスは両親の早すぎた死を思った。彼はその死のために他人のなかにほうり出されたが、彼にはそれがかえって恵みとなった。戦時下の重苦しい歳月は彼を向上させ、彼

を教育した。疫病や病からさえも彼には健康の泉がほとばしり出た。エスターによって命が差し伸べられ、与えられた。人生という学校は人を向上させるところ以外のなものでもありえない。彼がかつて子どものころに夢見たことは現実となった。彼はアラジンとなって、無数の財宝やまばゆい果物で目がくらみそうな地下の洞窟に下りていった。彼はそこで不思議なランプを発見した。それを持ってわが家に帰ってみると、それは——亡き母の聖書だった。

そうだ、そのとおりだ。ニールスは新しいアラジンとなって科学という洞窟に下りてゆき、不思議な果物のなかに命のランプを見いだそうとしてつかんだものは、——母の古びた聖書だったのだ、ただし、聖書という形をもった書物ではなくて、そこに宿る神の心をつかんのである！

無意識のうちに信仰と固く結びついていた童心が再び目覚めると、科学は神の全能を、知恵を、善を讃美しているものとなった。知性によって、自然のなかのおきてや神の思い、そうしたものをおびただしく見いだせる恩寵を神は人間に与えた。だが、精神界の愛のおきてまでは、科学をもつてしては到達できない。地上の私たちにはこの世のことしかわからない。精神界のより高いものには、私たちはただ〈希望〉と〈信仰〉を抱いているにすぎない。日ざしは教会の窓越しに、祝いに華やぐ会衆と若い新郎新婦の

ように喜びに胸躍らせながら祭壇の前に立っている老夫妻を照らした。日の光は、人々の胸のなかまで照らし、そこには幸せがふれていた。(三六一頁以下)

この最後の引用文には、愛する者の死は何を意味するのか、人生はなぜ理不尽な苦しみに満ちているのか、という根源的な問いと、それに対する答えが明示されています。今やニールスは新しいアラジンとなって「科学という洞窟」に下りてゆき、聖書にやどる「神の心」をつかみます。彼にとつて科学は、神の全能と知恵と善を讃美するために、なくてはならぬ道具となっています。しかしこの科学でも到達できないもの、それが愛であり、それは信仰によってのみ理解できるのです。

第二章では、「童話」の中に現れる自然神主義的傾向を指摘しましたが、この傾向は、本章で示された科学と信仰の関係に関する理解と、どのように関連するのでしょうか。科学を生み出した力を理性と呼ぶとすれば、アンデルセンは、理性の「限界」という認識はもつていても、理性の「破れ」という直観はもつていませんでした。アンデルセンは戦争を経験しながらも、科学の進歩に対する明るい希望を抱いていました。その姿勢は「童話」〔66・数千年後には〕「109・新しい世紀のミューズ」にも表れています。二十一世紀に生きるわたしたちからみると、彼の理解は

余りにも楽観的にみえますが、初めて汽車に乗った世代であることを思い起こすならば、彼も時代の子であったというべきでしょう。したがって、「童話」に見られる自然神秘主義は、科学を排除するというよりも、むしろ科学との調和を志向しています。自然は間接的に神の真善美を映しだし、神によって与えられた理性は、「信仰の畑から迷信という雑草を引く抜く」（二九二頁）役割を託されていると理解されています。

引用の最後に出てくるのは、やはり「お日さま」の光です。「童話」の中でそれが神の愛の象徴として用いられていたことを思い起こすならば、主人公たちにとって、神はやはり「愛」であったこととなります。

そしてこの小説は、四人が互いのために祈り、最後に共に「主の祈り」を唱える場面で終わっています。一般の常識からすると、祈りで終るといふこの形は、余りにロマン主義的であると感じられるかも知れません。しかし宗教の視点から見ると、それは特別な意味をもっています。特にキリスト教において「祈り」は「人格的対話」を意味するため、この記述は、四人とも心を開き、とりなしの祈りをささげたと言っていることとなります。

そして最後の最後に、この作品は、「神の愛がこの地上で私たちに生を、永遠の（生）を与えたまうとき、どんな世界もやがては開けてくるのである」（二六三頁以下）との言葉で締めくくられ

れています。この直前に、星の世界も「やがていつの日か、そこも私たちの実証の世界になる」という文章があることからみて、「どんな世界もやがては開けてくる」とは「やがてすべてが実証される」ことを指すと考えられます。それゆえ科学と宗教は調和する、と言っていることとなります。しかも地上での「生」をわざわざ「永遠の（生）」と言い換えています。生のなかには、「不滅の生」が備えられているからです。

ニールスが人生の岐路に立たされると、必ずといってよいほどそこに大切な女性が現れます。母親、義姉ボーディル、恋人エスターと、それぞれの役割は異なりますが、いずれも彼を神への信仰に導く役割を果たしています。彼らは、あの「雪の女王」のゲルダのように、知性よって凍りついたカイの心を、いやニールスの心を凍解し、解放する役割を果たしています。この三人を集合人格として統一的に捉えることができるのであれば、ニールスは、彼らの母性的人格によって信仰的危機を乗り越えたということもできるでしょう。したがって宗教的に問わなければならないのは、やはり、アンデルセンにとって重要なこの母性とは何かということでしょう。

2 詩人アンデルセン

前項では、アンデルセンの小説に表れた宗教意識に焦点を合わ

せましたが、本項では、彼の詩に表れた宗教意識に着目してみましよう。散文と異なり、詩は本来解釈という行為にあまりなじまないもので、ここでは、詩を紹介することにとどめます。数ある詩篇の中から、筆者の感覚で、宗教的モチーフがはっきりしていると考えられるものを選択しました。じっくり味わってみてください。いずれの作品も、山室静訳『アンデルセン詩集』（弥生書房）からの引用です。

・世界は偽りだ

世界は偽りだ、世界は醜い

お前はただ一つの魂をも信じてはいけない

罪は子どもの時の踵にもう噛みついたのだ

思想家を証人にするなら——やれ、やれ！

われらはすべて地獄の炎の中にあつて

永遠に燃やされているのを見る！

なんという悲惨！

炭になつて死ぬのはむしろめでたい終末

信仰は人生の流れの上への太陽の目くばせ

信仰は人間のもつとも美しい夢！

刈り取られた穀物はまた生えることができる

だが私は生えはしない。ああ、わたしに信仰を与えよ
わたしの子供の頃の信仰を——だがあれは嘘つきだぜ
世界は偽りで軽はずみだ——いや、もつと悪い！
子供の信仰にはわれらの主の接吻がある
だが私の心と感覚はもはや子供じゃない
私は決して天国には入れないだろう

・讃歌

木から落ちる葉のように

そのように私の地上の生命はもはやないのだ！

あなたが私を呼ぶ時は用意ができています

神よ、あなたは私の心をすべて知っていていられ

私の中に住む邪悪もすべて知っていていられる

それでも私の慰めはかくも大きいのです

私の彼方へのさすらいの痛みをどうか短くして

少年のまつたき勇気を恵みたまえ

あなたは思想を審き、行為を審きたまう

慈悲をもつて、いとしい父なる神よ

私は不安を振り落して、ただあなたをのみ見ます

イエスの名において、あなたのみ心が成就せんことを！

・祈り

かくもやさしくまた愛すべき、おんみ永遠の神よ！

ふたしかなわが足どりにおんみの光をおくりたまえ

わが胸に正しきことのみを欲する光を！

キリストの教えたもうところを、私は断じて忘れますまい

おんみは太陽の中より語り、われらに救いをもたらし給いき

おんみはわれらをその扉の中で生まれしめ、その扉の中で死なし

めます

おんみはわが胸に光を投げ入れて、その中に真理の生命を与える

種をおかれました

私は戦い、またよろめきます、しかしいつかは港にたどりつくで

しよう

おお、私に欠けているものが私のために開かれるようになさしめ

給え

わたしにとってキリストの教えとは愛の教え

かかるものとしておんみはわれらの許に来られたのです

おんみに力と栄光あれ！

・重たい時

われらの時はいまその知恵の書を書いている

それは善い方へ向かうのか、より悪い方へ向かうのか？

人がもはやわれらの主を信じないほどに

そんなに賢くなるのは恐ろしいことだ！

おお、それは誰にとつてもよいことだったのだ

それぞれの天賦うすき者が

おのれの頸に石臼をぶらさげて

海の底にころがっているのに腹を立てることは

いまやあまりに賢くなった者は知っている

神は人間の知恵から創られて

人間は不可謬であり

根本の材料は生命の泉だと

われわれが務め、生き、悩んだすべては

生命の炎に呑みこまれて

底のない虚無の中にわれらは沈みこむ

悪も善も一つで同じものなのだ

おお、永遠の神よ、われらの許に留まりたまえ、どうか！

あなたの中に、またあなたと共に、すべては与えられています

われらに慈悲をもって永遠の生命を

また地上の生命の思い出を与えたまえ！

・老人

いま私は死と墓場との

大きな戸口に立つ

塵の世に生きること七年の十倍

それが神の与え給たもうた場所だ

私の身体はすり切れたボロ切れとして投げ捨てられた

では魂は？——魂だって抹消されるのだ

私の愛し、努力し、生き、嫌ったすべては

忘却の中にとび去るのか？——それが永遠なのか？

その全体はただ無目的の

力の戯れなのか？

ではなぜわれらには永遠への

こんなあこがれが与えられているのか？

われらのためにその生命をささげたイエスも

ただわれらと共に死と墓場を見出し、かちえたのだ

そんならわれらの信仰、われらの希望、われらの生命は虚偽で
愛の偉大な奇蹟はなかったのだ！

あらゆる泥人形の歩みを規制する力は

〈留まれ！〉という言葉だ

そこから愛の^{ほとぼし}進り出た摂理は

永遠の生命をもつ

——神がおのれの似姿として創造した魂は

不壊であつて失われはしない

われらのこの地上の生命は永遠なるものの種であつて

われらの肉体が死のうと魂は死ぬことができないのだ！

〔訳者注…アンデルセンの墓には、この詩の最後の四行が刻まれている〕

・一詩人の最後の歌

私を高く連んでゆけ、お前、強い死よ

魂の大きいなる国へ。

私は神が私に命じた道を進んだ

額を高くもたげて。

私が世に与えたすべては、神よ、あなたのもの

どれだけの富が私にあるのか、私は知りませんでした
私が費やしたものはほんのわずかです。

私は枝の上の小鳥のように歌っただけでした。

さようなら、あざやかに赤い一本一本のばらよ

さようなら、お前、いとしいもの！

ただ私を運んでゆけ、お前、強い死よ

たとえこの世にあるのが楽しいにせよ！

ありがとう、神さま、あなたが与えて下さったもののために

ありがとう、これから来るもののために！

死よ、時間の海を越えて飛んでゆけ

さあ、永遠の夏に向かって

〔訳者注…この詩は最後の詩ではない、たぶん一八六七年に書かれたもの。その年末に出した最後の詩集「知られた詩、忘れられた詩」の最後におかれている。その内容から見ても、作者はこれを自分の人生への訣別の詩としたのかと思われる〕

以上の詩をみなさんはどのように読まれたでしょうか。筆者の印象をメモ風に記しておきますので、参考してみてください。

・「世界は偽りだ」

「子供の頃の信仰」を求めつつも、「わたしは決して天国に入れないだろう」というこの結びをどのように読むのか。信仰か知性か、というあのニールスの悩みにも通じる言葉です。なお、ここにも「太陽」が出てきます。

・「讃歌」

死を意識しつつも、「思想」と「行為」を超えた愛、人間の邪悪よりも大きな愛への信頼が感じられます。

・「祈り」

「私にとつてキリストの教えとは愛の教え」という告白が印象的です。しかしキリストの十字架と復活への眼差しは感じられません。ここにも「太陽」が出てきます。

・「重たい時」

一方に、「知恵の書」を書く人間、「不可謬」の人間。他方に、「底のない虚無」の中に沈む人間。「永遠の生命」を求めつつも、「地上の生命の思い出」を求める人間。これが、詩人の見ている二重の現実です。

・「老人」

「われらの肉体が死のうと魂は死ぬことができななのだ！」これが詩人の達した最終的境地です。しかしイエスの死と墓も、この視点から捉えるべきだというのでしょうか。聖書はキリストの

復活を証言し、信条は身体の甦りを告白しているのですが……。

・「一詩人の最後の歌」

「ありがとう」という言葉を残して、「永遠の夏」に向かって飛び立とうとしています。自らの生涯を「神よ、あなたのもの」と言いきっています。見事であり、迷いを突き切った世界が感じられます。詩人にとって、「バラ」は特別な存在であったようです。

結び

「アンデルセンの「童話」に表れた宗教意識」を明らかにするために、本論では、まず第一章において、彼の年譜を紹介しました。これにより、彼の生涯を俯瞰することができました。彼はたしかに「童話の王様」と呼ばれるにふさわしい作品を残していますが、詩人、小説家、戯曲の作家、さらには旅行記家といった顔も持つっており、彼の宗教意識について論ずるには、総合的な取り組みが必要になります。第二章では、いくつかの童話を選び、そこにてでくる宗教意識を論じました。そして例えば、「お日さま」のもつ象徴的役割、自然神秘主義的傾向、霊魂不滅説に通ずる「不滅の生」に対する信仰、自然科学的知見と伝統的宗教観の相剋、神義論的関心、といった問題が表れていることを指摘しました。そして第三章では、まず小説『生きるべきか、死ぬべきか』の内容を検討し、主人公ニールスの成長過程を跡づけました。その結

果、彼は、大学での知的訓練のゆえに幼子の信仰を捨てたにもかかわらず、友人や恋人の死を通して、再び「不滅の生」への信仰をもつようになったことが分かりました。次に、アンデルセンの詩のなかで宗教的テーマを扱った作品をいくつか紹介しました。ここでは、「子供の頃の信仰」の喪失と再獲得というテーマ、人間の知恵のゆえに「底のない虚無」に沈み込んでいる現実の確認、永遠の生命への希求、死を目前にしながらも神に感謝しつつ「魂の大きいなる国」に向かおうとする詩人の姿、などが歌われています。

これらの小説や詩を背景に「童話」を読むならば、彼の童話のなかに「不滅の生」をテーマとした作品と同時に、「童話」にしては暗すぎる作品、人間の現実の非情な冷酷さを指摘している作品（「28・もみの木」や「45・影法師」を参照）があることも、よく理解できます。

アンデルセンは、信仰と理性は調和しうる関係にあると解していますが、二十一世紀の人間は、単純にこれをそのまま受け入れるわけにはゆきません。理性には限界があるというだけでなく、理性それ自体が実存の破れを抱え込んだままであり、人間の開放性という名の欲望をコントロールできないからです。比喩的に表現するならば、人間はブレーキの壊れた車であり、人間には緊急自動停止装置はついていません。この意味で、たしかにア

ンデルセンの調和の理解に対しては疑問符を付さなければなりません。しかしながらアンデルセンの童話には、この調和の理念を内側から破壊する要素が含まれています。つまり彼の、「あまりに複雑な性格」(E・プレスドーフ、前掲書、四一七頁)のゆえに、楽観的な作品もあれば悲観的な作品もあり、それらの緊張関係は、彼の唱えた「調和」という概念を破壊する可能性を秘めています。この緊張関係を解決する一つの道として、彼は「不滅の魂」を信ずる生き方を提示しました。しかしこれがキリスト教の身体の魅りの信仰と両立しえないことは本文の中で確認したとおりです。いずれにせよ、現代人もアンデルセンと同質の問題に直面していることはたしかであり、科学の成果に依存しつつ、同時に科学のみならず自らの存在根拠を問わずにいられない状況にあります。これは、「無宗教」の立場に立つことにより、切り抜けることのできるような簡単な問題ではありません。では、私たちはどのような立場を、どのような理由で選択するのでしょうか。——なお、「無宗教」の問題に関する筆者の見解については、拙著『日本人の宗教意識とキリスト教』(教文館)を参照してください。

II 「グリム問題」の諸相

はじめに

「グリム問題」という言葉を聞いて何を思い浮かべるでしょうか。誰もそのような言葉を耳にしたことも、読んだこともないはずで、なぜならそれは、「グリム」をめぐる諸問題について語るなかで、筆者のうちに浮かび上がってきた造語だからです。「グリム」に関わる多様な問題をとりあえず一言で表現する必要からうまれた用語です。それは一種のブラックボックスで、そこにはまだ意識化されていない問題も含まれています。

教育現場で「グリム」という言葉を発すると、異口同音に「童話の話か」という少しさめた反応が返ってきます。「グリム」と聞いて『グリム童話』を思い浮かべることがあっても、その数が二百におよぶことは知らないようです。さらに『グリム童話』と『グリム伝説』は別なものであり、そもそも『グリム童話』は「グリム兄弟」によって収集されたものであることも知りません。この状況の中で、何をどこからどのように語り始めたらいのか、そのための航海図を作成する必要から生まれたのが、この研究ノートです。

第一章では、比較的詳しい「グリム兄弟年表」をまとめてみました。これは、専ら特定の作品に関心を持ち、直ちにその分析に飛びこもうとする若者にブレイキをかけ、歴史的背景に目を向けさせるためです。法学部に入ったはずのグリム兄弟が、なぜ昔話や伝説の収集に関わるようになったのか？ それは彼らにとつてどんな意味をもったのか？ 彼らの仕事は決して『グリム童話』だけで終らず、彼らの手がけた『ドイツ語辞典』などは、一九六一年に至つてようやく完結しています。彼らの仕事は、ドイツ語を話す人びとの心の琴線に触れる問題であつたからこそ、これほど長く継承されたのでしょうか。

グリム兄弟の生きた時代のドイツはまだ統一されておらず、政治的に極めて不安定でした。フランスのナポレオンがヨーロッパの覇権を握ろうとしていた時代であり、グリム兄弟の兄ヤーコプは、ヘッセン国の選帝侯ヴィルヘルム一世のもとで通訳として雇われ、ウィーン会議（一八一四年九月―一八一五年六月）に出席しました。この会議は、フランス革命（一七八九年）およびナポレオン（一七六九―一八二二、在位一八〇四―一四、一五）の大陸支配によつて混乱した秩序を回復することを目的としていました。しかし「会議は踊る、されど進まず」と評されたとおり、ドイツは悲願の国家統一を果すことができませんでした。ドイツの諸国は、それぞれ独立国としての権能をもつたまま、三五の君主国と

四つの自由都市から成る「ドイツ連邦（一八一五―一八六六）」を形成しただけでした。このドイツの統一が実現されたのは一八七一年のことであり、グリム兄弟は、結局、その成果を味わうことなく亡くなっています。彼らはどのような思いをもつて研究を続けたのでしょうか。

第一章「グリム兄弟年表」

この「グリム兄弟年表」の基礎資料として用いたのは、ヤーコプ・グリム著「自叙伝」（小澤俊夫訳『グリム兄弟』図書刊行会、一九八九年）、植田敏郎「グリム兄弟年表」『グリム童話研究』（日本児童文学学会編、大日本図書、一九八九年）、橋本孝著『グリム兄弟とその時代』（パロル舎、二〇〇〇年）、そして小澤俊夫著『グリム童話考』（小澤昔ばなし研究所、二〇一三年）です。なお引用の際には、人名等の日本語表記、漢字の使用、句読点などについて適宜修正を加え、できるだけ統一してあります。

この年表は、「読む年表」として作成されているので、グリム兄弟の生きた時代を想像しつつ、読んでみてください。きっと新しい「グリム問題」がみえてくるはずです。

「グリム兄弟年表」

西暦	事項	
一七八三	二月二三日、父フィリップ・ヴィルヘルム（一七五一―一九六）と母ドロテア・ツインマー（一七五五―一八〇八）は、ハーナウで結婚。	
一八八三	一月二二日、長男フリードリヒ・ヘルマン・ゲオルクが誕生。しかし翌年の春先に夭折。	
一七八五	J・K・A・ムゼーウス『ドイツ人の民間童話』（五巻、一七八六）を刊行。	
一七八五	一月四日、ドイツのヘッセン国（今日のヘッセン州）のハーナウで、ヤークォプ・グリム（Jacob Grimm）誕生。父フィリップ・ヴィルヘルム・グリムは弁護士を経て、ハーナウの町役場に書記として勤務。母ドロテアはヘッセン国の官吏（ハーナウの官廷官房顧問官）ツインマーの娘で、九人の子供を産む（八男一女、そのうち三人の男の子が夭折）。ヤークォプは次男。	
一七八六	「グリム兄弟の父親は牧師の息子、母親は役人の娘で、当時としては上流階級と言えるでしょう。父親のフィリップは、マールブルク大学法学部を出ています。ですから裁判官になれたのです。そしてヤークォプも同じ大学の法学部へ入っています」（小澤俊夫『グリム童話考』一四頁）。	
一七八七	「父はとても勤勉で、きまじめで、やさしい人でした。……私たち兄弟と妹は、口やかましく言われたわけではありませんが、父の生き方を通して、厳しくプロテスタント精神（改革派…祖父のフリードリヒ・グリムは、四〇年以上にわたって、シュタインハウの改革派の教会であるカタリーナ教会の牧師）を吹き込まれました。この小さな田舎町（シュタイナウ）で、数こそわずかでしたが、私たちに交じって暮らしていたルテール派のひとたちを、私は、親しくつきあうことの許されない、よその人間と感じていました。……そして今日でも私は、ごく素朴な、プロテスタント流にしつらえられた教会でなければ、ほんとう	
一七八九		に、心から敬虔な気持ちになれないような気がします。信仰全体が、それほど強く、少年時代の最初の印象に左右されるのです。……私の心の中に、もつとも強く敬虔の火がともされたのは、私が堅信礼の日に、はじめて聖餐を受けたあと、かつて私の祖父が説教壇に立った教会の祭壇のまわりを、母が歩いているのを見たときでした」（J・グリム『自叙伝』小澤俊夫訳、一七七頁以下）。
一七九一		「ハーナウでは、宗教改革以来プロテスタントに帰依する人が多く、ルター派よりもカルヴァンを信奉する改革派が多かった。この町にはもともと自由な雰囲気があつて、家内工業が盛んで、職人や商人の町でもあつた。フランスで新教運動の一つであるユグノー（カルヴァン派）への弾圧が始まると、多くのユグノーたちはオランダやドイツ、とりわけヘッセン国へ逃げてきた。ユグノーたちの多くは職人であつて、手にすばらしい技術をもっていたので大変歓迎された」（橋本孝『グリム兄弟とその時代』二〇頁）
一七八七		四月四日、ベッティーナ・フォン・ブレンターノ誕生。
一七八九		二月二四日、ハーナウでヴィルヘルム（Wilhelm）誕生。ヴィルヘルムは三男。
一七八七		フリードリヒ・ヴィルヘルム二世がプロイセン王に即位。クリスチアン・ヴィルヘルム・ギュンター『口伝えの物語から集めた子どものメルヒェン』を刊行。
一七八九		ヤークォプとヴィルヘルム、伯母（ヘンリエット・シュレーマー）に読み書きを習う。やがて町の教師ツィンクハーンに、ピアノ、算数、ラテン語を学ぶ。
一七八九		七月七日、フランス革命勃発。
一七八九		八月、議会が封建特権を廃止し、「人間および市民の権利の宣言」を採択。
一七八九		父が領地管理主務官兼法官になり、グリム一家はシュタイナウへ移る。
一七八九		二階には法廷と役所の事務所、それに一家の居住する部屋、す

なわち居間や食堂、台所、寝室などがあり、二階は勤め人の部屋であった。この屋敷には母屋の横に納屋や牛、馬などの家畜小屋もある」（橋本、二六頁以下）。

「教会の鐘が鳴ると、父は子どもたちに、漬けたクルミを与え、それから厳かに教会へと向かった。教会に行くと、父のために讚美歌集を開けるのはヤーコプの役目で、献金袋に小銭を入れるのはヴィルヘルムの役であった」（橋本、三四頁）。「授業のないときには、兄弟たちはよくキンチツヒ川を渡って、町の郊外にある自分たちの庭園ビーンガルテンに行った。……ここには野菜や果物畑があり、グリム家の台所を潤していた。この庭は二頭の乳牛を飼うくらいの大ささであったが、ニオイアラセイトウやアラセイトウが咲き乱れ、……遊び仲間と一緒にグリム兄弟たちは葡萄酒に登ったり、静かな森の中を散策したり、……自然を楽しみながら、……写生をしたり、いろいろな草花や蝶や昆虫を収集し、知らず知らずに、収集することがやみつきになっていった。グリム兄弟の何でも収集するという習慣は、このとき身に着いたのである。シュタイナウでのこのような自然体験があったからこそ、彼らの童話や伝説集の中で自然の雰囲気が見事に再生されるのである。シュタイナウにはまだ牧歌的な雰囲気が支配していた」（橋本、三五頁以下）。

一七九六

一月一日、父、肺炎に罹り、四十五歳で死亡。

四月、ナポレオン、イタリアへ遠征。

一二月、同居していた父の姉シュレーマーが死亡（一七三―九六）。

一七九七

三月、ナポレオン、アルプスを越える。

一七九八

四月、ヤーコプ、堅信礼を受ける。

五月、ナポレオン、エジプトへ遠征。

秋、兄弟は、ヘッセン選帝侯夫人の女官長を勤める母の姉ヘンリエッテ・ツィンマー（一七四八―一八一五）の援助により、母たちから別れてカッセルに移り、古典語高等学校（リュツェウム・フリーデリチアヌム）後のフリードリヒ・ギムナージウム

ム）に入学。

「グリム兄弟たちは、放課後には領主お抱えの先生に個人教授をしてもらい、特にフランス語をみてもらった」（橋本、四二頁）。「健康面では、ヤーコプは痩せていて、華奢に見えたが、ヴィルヘルムよりも強靱であった。……ヴィルヘルムの方は猩紅熱に罹り、胸の痛みと呼吸困難を訴えるようになる。それ以来寒くなり、風が吹くと、リュツェウムに通う道は彼にとって辛いものになった。このとき以来ヴィルヘルムは体が弱くなり、病気がちになる」（橋本、四三頁）。

春、ヤーコプ、マールブルク大学に入学。

「この当時は、大学というのは誰でも入れるわけではありませんでした。高級軍人の息子であること、高級官吏の息子であること、高額納税者の息子であること、という条件があったのです。しかし、ヤーコプは成績が抜群だったので、ギムナージウムの校長が国王に対して特別な推薦書を出して、入学を認めてもらったのです」（小澤、二二頁以下）。

「ヴィルヘルム・フンボルトが高等教育の改革を提案したことによって、ドイツの各国で改革がなされ、「アピトゥア」（高等学校卒業試験兼大学入学資格）が導入された。実際にそれが実施されたのは、プロイセンで一八二二年のことであったし、また兄弟の住む選定公国ヘッセンで、この制度が導入されたのは一八二〇年であった。したがって、グリム兄弟たちの時はまだこのような制度はなく、高等学校の先生の証明だけで大学に行けた」（橋本、四七頁）。

「愛する母の財産はほとんどなくなっていたので、私の勉学をなるべく早く仕上げ、希望の就職をすることによって、母の心配くれた大きな愛に、ほんの一部でも報いなければ、と思いましたが、私が法学を勉強した理由は、主として、亡くなった父が法律家だったからであり、また、母がそれをもっとも望んだからでありました。……選択がずつとあとに行われたのであれば、

私は、例えば植物学のような学問以外には興味をもたなかったことでしょう」(『自叙伝』一一二頁以下)。

八月、ナポレオン、終身統領となり、独裁が強化される。春、ヴィルヘルム、マールブルク大学に入学(当時、一六四名の学生が登録)。兄弟は、歴史法学の創設者で新進の准教授フリードリヒ・カール・フォン・サヴィニーの講義を聴く——サヴィニーは一七七九年の生まれで、ヤーコプよりわずか六歳上。『所有の権利』(一八〇三年)により歴史法学の基礎を築いた。

「サヴィニー先生の講義に関しては、私が強烈にひきつけられ、私の一生と全学問に決定的影響を及ぼした、という以外、言いようがありません。私はサヴィニー先生のもので、一八〇二年から三年にかけての冬に、法律学の方法論と法廷相続法の講義を聞きました」(『自叙伝』一一三頁)。

「ヨーロッパにおける法律とは、大きく分けて「ローマ法」と「ゲルマン法」に分けられます。とくに「ローマ法」というのは、ローマ帝国をつくっていった法律ですから、上から下への構造ができています。いわば法体系が先にあって、征服した民族をそれに合わせていく、支配に都合のいい法律です。それに対して普通「ゲルマン法」と呼ばれているものは、体系であるよりも、むしろ慣習法です。いろいろな慣習を積み上げて体系にします。サヴィニーは「ローマ法」も教えているけれど、彼自身は「ゲルマン法」に興味があつたようです。「ゲルマン法」というのは、小さな事実を積み上げるものです。そのためには何が必要かという点、結局、それは伝説なのです。法律とはいっても、古代ゲルマンの人たちの六法全書が残っているわけではないので、ひとつひとつの言い伝えとか文書とか、そういうものを集めるほかありません。それで伝説をよく集めることになるのです。グリムにはそれが大きな魅力だつたようです」(小澤、二六頁以下)。

「サヴィニーのところに入りに入っている間に、彼らは法律の本だけだけでなく、いろいろなドイツの文学、とくに古代ゲルマンの文

学に出会います。「エツダ」というアイスランドの古代の文学とか、「ニーベルンゲン」という叙事詩、あるいはデンマークの古い文学など、古代ゲルマン語の文献です。またサヴィニーとの付き合いが、ブレンターノとかアルニムとか、ドイツ文学史上、後期ロマン派と呼ばれている人たちとの付き合いにも広がり、グリムが『メルヒェン集』をつくる素地ができていくわけです」(小澤、二八頁)。

「ブレンターノはのちにサヴィニーの妹ゾフィーと、サヴィニーはブレンターノの妹クニグンデと結婚する。ブレンターノにはもう一人妹がいた。ペティーナである。ペティーナは、やはりロマン派の一人であるアルニムと結婚する。アルニムとペティーナの娘ギーゼラは、後年、ヴィルヘルム・グリムの長男ヘルマンと結ばれるのである。ロマン派の人たちは、分裂したドイツの国や同時代のドイツ人を憂い、ドイツのアイデンティティを求め、個人的にもつながりが親密であつた。彼らはしかし、互いに甘えたり、古傷をなめあうような関係ではなく、互いを認めながら、ドイツ人やヨーロッパ人の祖先が残した文化遺産を真摯に発掘し、収集した。彼らは、決してノスタルジアから古い時代に向かったのではなく、彼らの時代精神を正確に把握するために古い時代へ向かったのである」(橋本、五六頁以下)

夏、サヴィニー、ゲルマン法の古い資料、法律、そして文学を学ぶために、大学を辞めてパリに留学。
ナポレオン、皇帝となり、第一帝政を開く。

サヴィニー、パリの路上で重要なメモや書類の入ったトランクを盗まれ、それらのメモや書類の内容を復元するために、ヤーコプに手伝ってほしい旨の手紙を書く。ヤーコプ、二月にパリに到着。

「彼は日曜をのぞいて、毎日朝十時から午後二時までパリ国立図書館で法律の文献を比較し、古文書の読み方を学び、手書きや印刷された解説書から正確に抜き書きし、家に帰ってから、

一八〇五

一八〇四

師サヴィニーの書齋でそれらを、これまでの資料と比較し、学問的に正確かどうかを判断しなければならなかった。……このように集中的に精根を尽くして仕事をしている一方、ヤーコプはしかし時間があると、古代ドイツの研究を行った。一つには、マールブルクから弟ヴィルヘルムが、パリの古文書の中から古代ドイツ語の詩と文学作品を探すように言ってきたからである」(橋本、六一頁)。

「ヤーコプは、サヴィニーのために一生懸命仕事をした。その最中で戦争の危機を感じし、やがて国が変わるかもしれないという不安をもった。それは、パリの状況が日増しに不穏になっていったからである。そこでヤーコプは、国家の歴史の変化によっても変わることのない精神の世界での道を進むことを決意する。……ヤーコプが弟ヴィルヘルムとの共同研究を提案すると、ヴィルヘルムも、自分もそのことを心から願っていたとの返事をよこす」(橋本、六三頁)。

八月、ヤーコプ、カッセルに戻り、母と弟たちのために大学をやめ、仕事を探す。

一八〇六

一月、ヤーコプ、ヘッセン選帝侯陸軍師団書記局の秘書官となる。
五月、ヴィルヘルム、大学の卒業試験に合格し、カッセルに戻る。
一月一日、ナポレオン軍がカッセルを制圧し、ヘッセン選帝侯ヴィルヘルム二世は国外へ逃亡。陸軍師団書記局は部隊食料委員会に変わる。

「ヤーコプはひたすら政治的には沈黙し、弟たちや妹のために静かに小さな義務を果していた。しかしグリム兄弟は、ドイツ人として希望のないこの時期に、決して征服されることのない精神の王国を作るために、言語や文学、文化の研究に専念するのである。それはドイツ人の心を取り戻そうという試みであった」(橋本、七三頁)。

アルニムとブレンターノが収集した民謡集『少年の魔法の角笛』第一巻が刊行される。一八〇八年までに、第二巻と第三巻も刊行される。グリム兄弟もこの民謡の収集を手伝い、ヤーコプは

一八〇七

一三篇を、ヴィルヘルムは一五編を、それぞれ提供している。夏、ヤーコプ、陸軍師団書記局を辞す。
八月、ヘッセン国は、ナポレオンの弟ジェローム・ボナパルトが国王であるヴェストファーレンに合併され、カッセルはこの国の首都となる。
グリム兄弟、アルニムに勧められて、童話の収集に力を入れるようになる。

一八〇八

「私『小澤』は、グリムが『メルヒェン』を集めた根本思想は、ドイツ至上主義ではなくて、むしろ小さい、一見つまらないものに価値があるという思想、こちらの方に根本があったのだと思います」(小澤、三九頁)。
五月二十七日、母、五二歳で死亡。
七月、ヤーコプ、カッセルのヴィルヘルムスヘーエ城(当時はナポレオンスヘーエと呼ばれていた)にある王所屬私設図書館司書となる。

一八〇九

五月、ヴィルヘルム、ハレで療養。
一月、ワイマールを訪ね、ゲーターにやさしく迎えられ、深い感銘を受ける。

一八一〇

ベルリン大学が創設される。
一月、兄弟、ブレンターノにメルヒェンの記録を送る——この原稿は、返却されないままに、行方不明になってしまふ。ところが後に、エルザス地方のエーレンベルク・トラピスト修道院で発見されたため、この原稿は「エーレンベルク稿」と呼ばれる。

一八一二

ヤーコプ『古代ドイツの職匠歌について』を刊行。
ヴィルヘルム『古代デンマークの英雄歌、物語詩、童話』(翻訳)を刊行。

一八一三

兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』(初版)第一巻を刊行。
兄弟『八世紀、最古の二つの詩。ヒルデブラントとハドゥワラン』の歌とヴァイセンブルン(ヴェッツツブルン)の祈祷』を刊行。
九月、ナポレオン、モスクワに入城。モスクワの大火。

一八一三	ヤコブ、公使館秘書に採用される。	
	ジェローム王、カッセルとヴィルヘルムヘーエ城の古いドイツの文献、版画、古美術をフランスに送りだす。	一〇月、ナポレオン、セント・ヘレナに流される。
	一〇月、ライプツィヒの戦いで、連合軍がナポレオン軍を破り、ライン同盟は解散。ジェローム王は撤退し、ヘッセン選帝侯が復帰し、兄弟の伯母も女官長として王室に戻る。	兄弟『哀れなハインリヒ』、『古いエツダの歌』を刊行。
一八一四	ヤコブ、カッセルの図書館秘書となる。ヤコブ、ヘッセンから持ち去られた文献や版画などを取り戻すため、パリに向かう。その後、ウィーンへ赴き、「ウィーン会議」に出席。	兄弟『ドイツ伝説集』第二巻を刊行。
	「この会議はナポレオン後のヨーロッパ体制をどうするかであったが、そこには三つの原理が働いていた。一つは王政の復興、すなわち一七九二年の状態に戻すこと、二つには正統性、すなわち一八世紀の絶対君主制の復活。三つ目が連帯、すなわち各諸侯は連帯して革命理念やその運動を排除すること。要するに絶対君主制の復活と革命の撲滅であった」橋本、一二二頁。	兄弟『ドイツ語文法』第一巻（音韻と語形論）を刊行。兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』第二版を刊行。
	ヴィルヘルム、カッセルの図書館の第二司書となる。	妹ロツテ、ルートヴィヒ・ハッセンブルクと結婚。兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』コメンタール付き、第三巻を刊行。ヤコブ『ドイツ語文法』第一巻（音韻と語形論）を刊行。
一八一五	ヤコブ、ウィーンに滞在。その後、パリに持ち去られたプロイセン各地の図書などを取り戻すために、再度パリへ。兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』（初版）第二巻を刊行。	兄弟『ドイツ語文法』第一巻（音韻と語形論）を刊行。兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』の小型版を編集。この版は、一八三三年、三六年、三九年、四一年、四四年、四七年、五〇年、五三年、五八年と版を重ねた。
	六月九日、ウィーン会議終了。	兄弟『ドイツ語文法』第二巻を刊行。
	「解放戦争に参加した多くのドイツ人は不満であった。多くの人々は強い中央集権をもったドイツ連邦の統一国家を望み、他の人々は憲法による国民の自由と共同発言権の保証を求めた。この国家主義的な動きと自由主義的な動きがやがてくる次の時代の主要テーマとなっていく」(橋本、一三二頁)。	兄弟『ドイツ語文法』第二巻を刊行。
	「一九世紀という時代は、大きな政治運動のあった時代でもある。その運動の主なものはいベラリズム、ナシヨナリズム、社会主義、保守主義の運動である。これらの中からいろいろな政治的集団が生まれた時代で、一八二〇年代は、これらの主義のうち、リベラリズムとナシヨナリズム、保守主義の三つが主流であった」(橋本、一七六頁)。	兄弟『ドイツ語文法』第一巻（語形論）を刊行。兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』第二版を刊行。
		兄弟『ドイツ語文法』第一巻（語形論）を刊行。兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』第二版を刊行。

一八三〇	ヤークォプとヴィルヘルム一家、ゲッティンゲンへ移住。ヤークォプ、大学就任演説「郷土愛について」（ラテン語）を行う。ヴィルヘルム「ヒルデブラントの歌」を刊行。	
一八三一	ゲッティンゲン大学で学生騒動が起こる。ヴィルヘルム重病となる。ヤークォプ『ドイツ語文法』第三巻を刊行。	
一八三四	ヤークォプ『ラインハルト狐』を、ヴィルヘルム『フライダンク』を、それぞれ刊行。	
一八三五	ヤークォプ『ドイツ神話学』、『タキトウスのゲルマニア』を刊行。	
一八三六	ヴィルヘルム『ローゼンガルテン』を刊行。	
一八三七	ゲッティンゲン大学教授事件が起こる。ヤークォプとヴィルヘルム他五名が罷免され、ヤークォプはカッセルに戻る。	
	「当時ゲッティンゲンは、……ウイーン会議で承認されたハノーヴァー王国に属していた。一八三〇年には、ヴィルヘルム四世が大英帝国、アイルランド並びにハノーヴァー王国の王座に就いた。一九世紀になると、すでに見てきたように、ドイツの各領邦国家で憲法制定の声が高まった。その流れの中で、ハノーヴァー王国も憲法制定が認められ、一八三三年に公布される。これによって統治者は自分勝手なことは出来なくなり、君主と臣民の間には法的規制がとられることになり、人間はすべて一人の支配者の勝手な力で強制されることはなくなった。	
	一八三七年六月二〇日、ヴィルヘルム四世が亡くなった。彼には嫡出の後継者がいなかったため、大英帝国とハノーヴァーの同盟関係は終わった。ヴィルヘルム四世の後継としてハノーヴァー王になったのが、彼の弟エルンスト・アウグスト・フォン・クムバールント……であった。彼は兄の制定した憲法を	一八三九 一八四〇 一八四一
	知ろうとするどころか、同じ年の十一月一日には、それを廃止することを宣言した。一方、国家に仕える者たちは既に憲法に従うという宣誓をしていて、グリム兄弟も彼らの同僚も同じように憲法に忠誠を誓っていた。……大学では「神に誓ったあの宣誓を取り消す権限が王にあるのか!」と怒りの声が上ががり、このことをめぐって学内は騒然となった」（橋本、二二八頁以下）。反対声明に署名したのは、グリム兄弟をふくめわずか七名であった。「グリム家には、すでにみたように、ひとつのモットーがあった。すなわち「誠実に生きることは汝の人生を守る」という家訓の言葉である。それに彼らは、小さい時からプロテスタント改革派のもので、誠実に生きるように厳しく躾けられた。グリム兄弟だけが改革派ではなく、その他の五人の教授たちもすべて改革派である。これは注目すべきことではないだろうか。ハノーヴァーはもともとルター派の根拠地で、ルター派と改革派は至る所で衝突していた。このことも大いに作用したのではないだろうか」（橋本、一三五頁）。	
	ヤークォプ『ドイツ語文法』第四巻を刊行。ヴィルヘルム『子どもと家庭のメルヒェン集』第三巻を刊行。その後、一八四〇年、四三年、五〇年、五七年と版を重ね、最終版は一八五七年の第七版で、この最終版が今日一番よく翻訳されている。	
	ヴィルヘルム、家族と共にカッセルに戻る。兄弟、『ドイツ語辞典』の編纂を始める。ヤークォプ『彼の免職について』、『二〇、一一世紀のラテン詞』を刊行。ヴィルヘルム『ローランドの歌』を刊行。	
	六月、ヤークォプ初めて鉄道に乗る。	
	一〇月一七日、ヴィルヘルム一家、カッセルに到着。	
	ヴィルヘルム『ヴェルナー・フォン・ニーターライン』を刊行。	
	ヤークォプ『ドイツ語文法』第一巻、三巻を、『古判例集』第一巻、第二巻を刊行。兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』第四版を刊行。	
	兄弟、ベルリンへ移住。	

- 一八四二 ヤーコプ『古判例集』第三巻、『メルセブルクの呪文集』を刊行。
 一八四三 ヤーコプ、イタリア旅行。兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』第五版を刊行。
 一八四四 ヤーコプ、デンマーク及びスウェーデン旅行。ヤーコプ、アンデルセンを訪ねる。
 一八四六 フランクフルト・アム・マインにて第一回ゲルマニスト大会。ヤーコプ、議長に指名される。ヴィルヘルム、この大会で「ドイツ語辞典」について講演。
 一八四七 リューベックにて第二回ゲルマニスト大会。ヤーコプ『ドイツ語におけるベダンティックなもの』を刊行。
 一八四八 ヤーコプ、パウロ教会での国民会議に議員として出席。ヤーコプ『ドイツ語史』を刊行。
 「ヤーコプは年と共に考え方が過激になって行く。一八四八年の国民議会では既に見てきたように、彼は立憲君主制を唱えたが、同時に「私に納得できるのは、特権階級としての貴族階級はなくならなければならぬ」ということです。貴族階級というのは、香をなくしてしまつた華のようなものです。多分色彩すらなくしてしまつているでしょう。私たちは、最高のものとして自由を置こうと思います。自由よりなお高いものを加えられるものがあるでしょうか。……」と言つて、階級制度の廃止を根拠にもつていた。それから一〇年たつとヤーコプの考えはさらに発展し、……「年をとればとるほど、私は民主主義的な考え方になつていきます」(橋本、三二二頁以下)と表明している。
- 一八四九 ヤーコプ『学校、大学、アカデミーについて』を、ヴィルヘルム『フライタンクについて』、『古代ドイツ談義』を、それぞれ刊行。
 一八五〇 ヤーコプ『所有のことは』を刊行。兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』第六版を刊行。
 一八五一 ヤーコプ『言語の起源について』を刊行。この本は一八六二年までに五版を重ねる。ヴィルヘルム『音韻の歴史について』を刊行。
 一八五二 兄弟『ドイツ語辞典』第一回配本を開始。

- 一八五三 ヤーコプ『ドイツ語史』第二版を刊行。
 一八五四 兄弟『ドイツ語辞典』第一巻を、ヤーコプ『ドイツ法律古事誌』第二版を、それぞれ刊行。
 一八五六 ヴィルヘルム『子どもと家庭のメルヒェン集』コメンタール付き、第三巻、第二版を刊行。
 一八五七 兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』第七版を刊行。
 一八五九 二月一日、ヴィルヘルム死去。マテウス教会墓地に埋葬される。ヤーコプ、ベルリン・アカデミーにおいて「シラーの思い出」と題して講演。
 一八六〇 兄弟『ドイツ語辞典』第二巻を刊行。ヤーコプ、ベルリン・アカデミーにおいて「老齢について」(一月二六日)、「ヴィルヘルムの思い出」(七月五日)と題して講演。
 一八六二 ヤーコプ『ドイツ語辞典』第三巻を刊行。この事典編纂はその後も続けられ、一九六一年にようやく完成。
 一八六三 文久遣欧使節団、ベルリンを訪問。
 ヤーコプ『古判例集』第四巻を刊行。この編集作業は彼の死後も続けられ、一八六九年に、全七巻で完結される。
 九月二〇日、ヤーコプ死去。マテウス教会墓地のヴィルヘルムの墓に並んで埋葬される。

第二章 「グリム童話」と「グリム伝説」を

読み解く人びと

前章では、グリム兄弟の生涯をイメージするために、かなり詳細な年表を読みました。いかがでしたでしょうか。いくつか新しい発見があったかもしれません。

本章では、「グリム童話」と「グリム伝説」を様々な視点から読み解こうとした人びとの作品を紹介します。これらを通して、

同じテキスト(本文)について、これほど多様な解釈があるのか!と驚いてもらうためです。最終的には、それらの多様な理解をどのようにまとめるのかという難問が残りますが、今回はその問題に入らず、その一步手前のところまで進んでみたいと思います。

最初に取り上げるのは、マックス・リュティイの名著『ヨーロッパの昔話——その形式と本質——』(小澤俊夫訳、岩崎美術社、一九六九年)です。

1 マックス・リュティイ

マックス・リュティイは一九〇九年、スイスの首都ベルリンに生まれ、一九二八年から三五年までベルン、ロンドン、ベルリンの各大学で、ドイツ文学、イギリス文学、歴史学、スイス史学を専攻しました。リュティイは、一九四七年に出版された『ヨーロッパの昔話——形式と本質——』により、研究者としての地位を確立し、それ以後、多くの論文により、ヨーロッパにおける最も優れた昔話研究者のひとりとみなされました。彼は、一九六八年から一九七九年まで、チューリヒ大学の教授としてヨーロッパ口承文学を教え、一九七九年に七〇歳で退官し、一九九一年に亡くなっています。

『ヨーロッパの昔話——その形式と本質——』の目次は、「序

説」「二次元性」「平面性」「抽象的様式」「孤立性と普遍的結合の可能性」「純化と含世界性」「昔話の機能と意義」「昔話研究について」の八項目から構成されています。この中で特に「二次元性」と「平面性」と「抽象的様式」の三つは、著者の言う昔話(Volksmärchen)の特徴を表しています。したがって、これらの三つの用語の意味内容を理解することができるとすれば、私たちは、昔話を読むための三つのカギを手に入れたこととなります。

早速その内容を紹介したいところですが、その前に、彼の書物を正確に読むための二つのコツをあげておきます。一つは、「昔話」の特徴が論じられる場面で、「伝説」との違いを思い起こすように努めることです。彼の場合、「昔話」は、常に「伝説」と対比しつつ考えられているからです。一端このことを身につけるならば、彼の主張はかなり明確になるはずですが、私たちの認識には、反対概念をイメージするときに、より明確になるという性質があるからです。例えば、「白」という言葉は、その反対の「黒」という言葉をイメージするときに、その意味内容がより豊かになります。リュティイの著作を読む際には、是非、この「昔話」と「伝説」の対比を思い起こして下さい。

もう一つは、その研究方法の特徴に関わることです。今日、昔話を含む口承文芸は、民俗学、民族学、神話学、深層心理学、教

育学、フェミニズム、社会史といった諸学問の研究対象とされており、どの立場に立って研究するかにより、同じテキストでもかなり違った側面が強調されます。では、リュティの場合はどうでしょうか。彼の立場は文芸学とみなされており、その方法になじんでいるひとであれば何の問題もありませんが、初めてのひとは少し戸惑うかもしれません。それは、極端な言い方をすれば、目の前にあるテキストの背後に遡ろうとせず、テキストそれ自体の構造を読みとろうとする方法です。時間的に言えば、対象を過去・現在・未来という時間軸の中で考えるというよりも、共時的に捉えようとするアプローチです。

この方法に違和感を覚えるのは、すでに私たちのうちに、時間軸にそって考えるという習慣が根づいているためです。しかしこれは、最初から身についていたわけではなく、中学生ぐらいから学習によって培ってきたものです。それ以前は、「歴史」という言葉は知っていても、その内容をそれほど明確にイメージできなかったはず。あるテキストをこの時間軸の中で考えるという作業は、いわば大人の作業です。したがって、この時間軸を排除する仕方で考えることは、大人の常識に反し、どうしてもそこに違和感が生じます。歴史学的方法と文芸学的方法のこの違いをあらかじめ予想しておくならば、無用な混乱は避けられます。もちろん両者は、最終的に統合されなければなりません。それは学

際的方法によって遂行されます。

「二次元性」

昔話や伝説には、人間、動物、そして鳥の他に、地下住民、森や水の精、巨人、小人、魔女、恩義に報いる死者といった、別次元に住む存在が登場します。彼らは超越的世界ないし彼岸に住む存在であり、リュティは彼らを彼岸者と呼びます。この彼岸者の住む超越的世界に対し、私たち人間の住む世界が此岸であり、そこに住む者が此岸者です。

リュティが問題とするのは、この彼岸者と此岸者の関係です。したがって「二次元性」という言葉から、直ちに超越的世界がなくなってしまうような状況をイメージしてはなりません。二つの世界が存在することを前提としつつ、しかも感情の面で両者の区別が曖昧になっている状態、それが「二次元性」という用語に込められた意味内容です。例えば彼はこう言います。

「昔話の人物たちは、主人公も脇役もこれらの彼岸者たちがまるで自分たちと同類のものであるかのように彼らとの交渉をもつ。……昔話の人間たちには自分と彼岸者との間の隔絶の体験はない。彼らにとって彼岸者は援助者または迫害者として重要なのであって、彼岸者の出現自体には興味がない」（九頁以下）。「昔話のなかには超越的の不安とか、超越的好奇心というものはない。

もし好奇心がある場合には、それはかならず普通の世界的好奇心である」(一一頁以下)。「魔女や竜や巨人などは、彼らにとって人間の悪漢や盗賊と同じ程度の怖さなのである」(一二頁)。「昔話でも此岸的人物と彼岸的人物は区別される。しかし彼らは互いに接して存在しており、何のこだわりもなく交渉をもっている。昔話の此岸者は、彼岸者のなかに別の次元を感じる感情をもっていない。この意味において私は昔話の《一次元性》をとらえるのである」(一七頁)。

この最後の引用では、別の次元の存在を前提としながらも、「別の次元を感じる感情」が欠如している事態を「一次元性」と呼んでいます——なお翻訳では、「一元性」という訳語が当てられています。小澤俊夫著『グリム童話200歳』(小澤昔ばなし研究所、二〇一二年)では、同じ内容が「一次元性」(一三五頁)と言い換えられています。したがって本論では「一次元性」という用語を用いることにします。

「平面性」

前項において、昔話では、超越的世界と日常生活は連続しており、両者の間に断絶は感じられていないと述べました。しかしだからといって、昔話では、日常的感觉がそのまま支配していると考えてはなりません。むしろここに登場する人間や物は、あたか

も具体的な肉体や血縁関係をもたないかのごとく描かれていきます。例えば、女主人公の手や腕が切り取られたり、馬の脚が狼に食いちぎられたりしても、血が流れることはありません。リュティはこれを「昔話の登場者はあたかも紙で作った図形のように、好きなように切り取っても別に本質的変化が生じるものではない」(二二頁)と説明しています。彼らには「感情の世界そのもの」(二三頁)が欠けているかのようであり、したがって彼らは内面的にためらうことも、迷うこともありません。内面的世界がないのです。昔話に登場する図形的人間は常に冷静であり、立腹、嫉妬、所有欲、愛情といった言葉が使用されている場合にも、本来の意味での感情の高揚や欲望あるいは情熱が話題になっているわけがありません。

したがって「昔話は残酷な刑罰は知っているが、復讐心は知らない。(悪人が主人公自身によって罰せられることは決してないといつてよいくらいない。それを受けもつのは脇役か彼岸者である)。昔話は婚約や結婚を知ってはいるが、エロティックな感情は知らない。昔話は彼岸者を知ってはいるが、超越的感情は知らない。そもそも昔話は感情の世界を述べることはしない。昔話はそれを物語のすじのなかにおきかえ、内的世界を外的事件の平面へと移しかえる」(二七頁)という説明が可能になります。そして昔話には時間の次元が欠けているため、若者や老人が登場して

も、彼らは成長したり、老化したりしません。その意味で昔話の若い主人公は「永遠の青春」(三六頁)のなかにおり、老人は老いたままです。このように具体的な立体性を欠く事態を、リュティは「平面性」と呼んでいます。

「抽象的様式」

「平面性」は、時間と空間に制約された私たちの日常的現実を作りかえることによつて生み出される世界であり、具象的世界の多様性がそぎ落とされているという意味で「抽象化された世界」です。その結果として生まれる昔話には、この抽象化にふさわしい様式がみられます。そのひとつは、「鋭い輪郭と超原色」が採用されていることです。「鋭い輪郭」とは、画家がカンバスや画用紙に絵を描く際に、細部を省略し、対象の輪郭を明確に描くことになぞらえた表現です。例えば、昔話にでてくる堅牢な家、お城、地下の宮殿は、奥行きのある洞窟や茂みと異なり、周囲からはつきりと目立っています。登場人物が身につけている指輪、杖、刀なども、その輪郭が明確です。死刑の宣告を受けて馬裂きの刑に処せられる者も、血なまぐさく引き裂かれたり、寸断されたりせず、寸分たがわずまふたつに分解されます。その各部分は明確な線をもっており、そこから一滴の血も流れず、またその固定した形は少しもそこなわれません。事物や生物が「金属化」したり

「鉱物化」したりする傾向も、同じく「鋭い輪郭」を強調する役割を果しています。金属では黄金、銀、銅など、高貴で稀なものが好まれ、それらは対象を孤立化させる働きをしています。

この孤立化は、そもそも昔話の登場者や物が時間的・空間的制約から解放されているがゆえに可能なことであり、これには二つの現象が伴います。ひとつはその登場者や物が具体性を失うことから生まれる「純化」という印象です。例えば、そこに登場する「王」や「王子」は、現実的な権力から解放された存在であり、昔話が好む「極端な存在」にすぎません。昔話は、この形式が貫かれるかぎり、あらゆるものを取り入れることができます。これが第二の現象であり、リュティはこれを「含世界性」と呼んでいます。要するに、昔話は、日常的なものであれ、非日常的なものであれ、あらゆるものを現実味のない、しかも孤立したものとして取り込むことができる様式を備えています。その孤立したものを結びつけるのは話の筋だけであり、ひとつひとつの内容が孤立しているため、同じような表現が繰り返されることも厭いません。いや、むしろそのことが要求されます。

色彩の取り扱いについては、次のような特徴がみられます。現実生活では、原色よりも中間色の方がはるかに多いのですが、昔話では「超原色」が好まれます。リュティはその例として、金、銀、

赤、白、黒、そして紺青を上げています。中間色としては灰色しか表れず、昔話においてこの色は金属的性格をもっています。昔話の馬は、黒か白、あるいは赤です。森は「大きい森」や「暗い森」と形容されることはあっても、「緑の森」と呼ばれることはありません。

以上、昔話の特徴といわれる「一次元性」と「平面性」と「抽象的様式」の意味内容を紹介しましたが、次に、そもそもリユティは昔話という文芸をどのようなものとして評価しているのか、そしてそこにはどんな人間像がみられるのか、を考えてみましょう。

第一の問いに対する答えは、「一見」、すでに説明した「抽象的様式」という言葉に内包されているようにみえます。というのは、「抽象」は「具象」に対応する用語であり、近代科学の発想を前提にすると、「抽象」とは個々の具体的事物や事例から、それらを貫くより普遍的なものを抜き出すことを意味し、自然科学では法則性の認識に至る過程を指します。そこで見いだされるものは本質的なものであり、具象よりも高い価値を有すると考えられています。したがって、昔話には「抽象的様式」がみられるという表現は、それだけで、昔話は子供だましのウソやファンタジーではない、ということを示唆している「かのような」です。

では、文芸学研究者リユティにとって、昔話とはどのような文芸なのでしょうか。彼はこう述べています。

「昔話は素朴なひとのための文学ではありえよう。しかし素朴なひとによる文学ではありえない。昔話は純粹な文学として、たぶん高度な芸術家の作品であり、そこから民衆のところまで降りてきたのである。昔話は純粹な文学的観照から成りたっている。それを夢想的観照と呼ぶことは確かによからう。しかしそれは疑いもなく詩人の白昼夢のことであって、普通の夜の夢ではない」(二七七頁以下)。

「民衆は昔話の運搬者であり養育者であるが、創作者ではない。昔話は、予言的な詩人が民衆に与えた贈りものであろうと私は思われる。昔話のそもそもその創作者はだれなのかということは、われわれにはわからない。それらの創作者たちが、昔話をどの程度民衆にふさわしい、また口承に適した形式で民衆に提供したのか、あるいは元来の昔話が民衆の口に伝えられるようになってから洗練されたのはどの程度までなのか、という問題は確証困難なことである」(二七八頁以下)。

この二つの引用文の内容とあの「抽象的様式」という表現は、うまくかみ合わないように思われるのですが、どうでしょうか。この引用文にてでくる「観照」とは、元来、主観を交えずに冷静に現実を見つめることを意味し、美学では、美を直接的に認識す

ることを指します。問題は、ここでいう観照が、概念的なものなのか、それとも直観的なものなのかということ。この項の冒頭部分で、「抽象」を説明する際に、「具象」との対比を用いて、「より普遍的なものを抜きだす」として説明しました。これは明らかに「概念的なもの」に近い説明です。しかし、もしもこの「抽象」がより「直観的なもの」であるとすれば、最初の説明は正しくないこととなります。このことを予想していたからこそ、その説明の最初に「一見」と言い、最後に「かのようです」と述べたのです。このような混乱の原因は、「直観的な」内容が「抽象」という語によって説明されていることにあります。

もしも「抽象の様式」という表現を「直観の様式」と改めたらどうなるでしょうか。はたしてリュティの問題意識がこの変更を認めるのかどうか、最終的にはこれが問題になります。筆者は、リュティが教育との関連で昔話の人間像を取り上げる際に、昔話は信頼を基本とするがゆえに、不安を内包する伝説よりも先に提示されるべきであると主張していることを注目したいと考えています。そこでは初めから、昔話は子どもにも分かる、という前提で議論がなされています。これは、暗黙のうちに、昔話は概念の世界ではないと主張していることとなります。もしもそうだとすれば、それはより直観的なものであるということになります。そしてこの「直観の様式」が昔話の基本的な枠組みとなっており、

多くの子供たちがそれを受け入れている事実は、子どもにも、そのような直観的認識能力が与えられていることを示唆しています。理性的認識だけでなく直観的認識にも普遍性が認められるとすれば、以上のような議論も十分に可能です。

それでは第二の問い、つまり昔話は人間をどのような存在とみているのでしょうか。リュティの発言を聞いてみましょう。

「われわれが昔話のなかにみいだすものは、人間存在の本質的諸関係を孤立的、浄化的に、かつひとつの秩序をあたえながら叙述する冒険物語である」(二二六頁以下)。

「昔話のえがく主人公は、究極的には孤立した、しかし普遍的に関係を結ぶ能力のある人間なのである。明白な内的真実をもつたひとつの人間像である。すなわち人間というものはくりかえし援助が与えられるが、究極的には孤独なものである。しかも人間は自然の諸力に身をまかせることができる。そして人間は、昔話の主人公が自分の出会う「彼岸者」の宇宙を見きわめることができなれないとおなじく、そうした自然の諸力の全体的関連を見きわめることはできない。……伝説では人間は観察者であり、告白者であり、未知の世界への突入者である」(二二〇頁以下)。

「まるで昔話はわれわれにつきのことを保証しようとしているかのように思われる。すなわち、お前自身はどこからきて、どこ

へいくのかを知らなくても、あるいはどのような力が、どのようなおまえにおおいかぶさってくるか知らなくても、あるいはどのような関係のなかに自分がうめられているのか知らなくても——お前は自分が深い意味のある関係のなかに立っていることを確信してよろしいと」(一六六頁以下)。

以上が、一九四七年に出版された『ヨーロッパの昔話——その形式と本質——』の概要です。次に、一九七五年に出版された『昔話 その美学と人間像』(小澤俊夫訳、岩波書店、一九八五年)の第五章「人間像」の内容を紹介しておきます。両者の間に二八年の時間が流れていますが、基本的な考え方は変わっていません。この章は、「メルヒエンの主人公」、「脇役と小道具」、「問題性」の三項から構成されています。簡単にその内容をみてみましょう。

「メルヒエンの主人公」

ヨーロッパのメルヒエンの主人公には、次のような特徴がみられます。①主人公はひとりっ子あるいは末っ子であることが多い。ここには「最後部優先の原理」が働いています。この主人公は、「帰郷者」ではなく、「本質的に、いわば空のなかへ出発していく人間、さまよい出る人間」(二九九頁)です。主人公は孤立者として描かれており、その意味で「欠如をもった存在」です。

しかし同時に、主人公には、あらゆる援助者と関係を結ぶ能力が与えられています。これは、孤立が、普遍的に関係を結ぶ行為の前提となることを示唆しています。②主人公は、タブー違反によって起る回り道を通して、次の段階へと上昇して行く存在です。ただし自分の運命を自力で開拓して行くのではなく、外側からの援助を当てにしているという点で、「宗教的傾向」(三〇五頁)がみられます。③主人公は旅人であり、行動者です。決して詮索する者でも、研究者でも、哲学者でもありません。これらにむしろ、昔話ではなく伝説の主人公の特徴です。メルヒエンの主人公は、援助者の起源も、自己も、世界も探求せず、世界をくまなく歩き、行動するだけです。④主人公は、救済を待ち望む、緊張感のなかに生きている存在ですが、これに耐えることにより、他人に対して援助者や救助者となることができます。しかもみずばらしい者、障害のある者こそが救助者になることができるとされています。⑤魔法メルヒエンは、人間が救済を待ち望む存在であることを証言しており、「ここにいたって、メルヒエンは宗教的感情の近くに立っていることが」(三一四頁以下) 分かります。

「脇役と小道具」

「脇役」にも「主役」との共通性がみられ、救済者であることも、

救済を待ち望む者であることも、さらにその両者であることでもきます。しかも伝説の場合と異なり、メルヒエンは、長い複数のエピソードをもつ物語であるため、脇役も小道具も、伝説、笑話、寓話におけるよりも、はるかに大きな役割を演じています。なお、メルヒエンの主人公と物との付き合い方を見ると、私たちの経験と異なり、主人公が物のとりこになることはありません。つまり主人公が物に執着することはありません。主人公は、一度ももらった魔法の物を、必要としない間は忘れており、必要なときにいつでも手にすることができる状態にあります。なおこの小道具には、魔法の物だけでなく日常的な物も含まれており、メルヒエンにとってそれらは共に重要なものです。

「問題性」

この項は、分かりやすい箇所と分かりにくい箇所の入り交じった内容となっています。全体としては、リュティがいくつかの批判や疑問に答えるという形式になっています。最初に、彼は自らの立場を説明するために、「メルヒエンの人間像」と「伝説の人間像」を対比的に要約し、この二つの人間像は相補的に理解されるべきであるとしています。この二つが分かりやすい部分です。次に彼はこれを前提に、「メルヒエンは残酷か?」「メルヒエンは抑圧的か?」「メルヒエンにおける悪とは何か?」といった問題

を扱っています。当然のことながら、リュティは学際的知見を用しつつ議論を進めるため、次第に、その引用された知見と彼の説く文芸論の関係がよく分からなくなってしまう恐れがあります。特に、ユング派の解釈に対する彼の対応は、肯定的でありつつ限定的であるため、注意深く読む必要があります。

ここではまず、これまでの話の流れと重なる前半部に焦点を絞り、改めて、リュティの捉えた「人間像」の内容を紹介しておきます。彼自身によるまとめを引用しておきますので、ゆっくり味わってみてください。

「メルヒエンの人間像」

「人間は援助と救助者をあてにしているし、必要なときには期待どおりの援助があたえられることもある。援助者は、ゆりかごから墓場まで、そばについていてくれる。人間は高度に危機にさらされている。だが同時に、遠い高い目標に到達する能力も持っている。人間は行動者である。人間は強い緊張と酷使に耐えることができる。その目標には、しばしば間接的に回り道をして到達する。人間には変化する能力があり、発達する能力がある。自分の実力を発揮してみせることもできるし、しおれることもある。他人への救い手となることもあるし、他人を墮落させる人間になることもある。また他人に救ってもらわなければならないこともある。」

あるし、他人に傷つけられることもある。人間は救済者になりうるし、救済されることもある」(三二八頁)。

「伝説の人間像」

「伝説では、人間は行動者としてより、むしろ運命と歴史に耐える者として登場する。メルヒエンの平面的にスケッチされた図形的人物とは反対に、伝説の人間は、精神的打撃を受ける。その体験したことが人間の魂の奥までしみこむ。そして人間を病気にすることがある。しかもその病いが死にいたることも稀ではない。ときには狂気のとりこになる——これは、メルヒエンでは決してないことである。……伝説の人間は不安にさらされている。メルヒエンの図形的登場人物も、怖がることはある。野獣に対して、竜に対して、魔女やいろいろな種類の怪物に対して。だが彼らは《具体的な》危険を怖がるのであって、超越的不安とか不特定のものに対する不安、不気味なものに対する不安は、彼らには無縁である。それでも、そういう不安は、根本的にいって、人間にふさわしい。口伝えの伝説は人間を、そのところから見ている。体験者としてスケッチされた人間は詮索者になる。彼は、自分を感動させたり震撼させたり不安がらせたりする力の由来と本質を探究する。解明されていないものの説明を求める。そのばあい、聖者伝の登場人物のように、宗教的信仰の確信とか教義にたよる

ことをしない。メルヒエンや聖者伝の登場人物と違って、伝説の人間は、高度に質問者である」(三二九頁以下)。

これら二つの人間像は、明らかに人間の「行動者」としての側面と「体験者」としての側面を表しており、どちらも同じ人間のひとつの可能性です。この前提に立ち、リュティは先に上げたようないくつかの問いに答えています。その内容を要約するところになります。①子どもに対しては、二つの可能性のうち、まず前者、つまり「メルヒエン」が与えられるべきです。それは子ども心の発達段階に即しているからです。「メルヒエンは子ども心の信頼でみえますが、伝説は不安がらせる」(三三二頁)からです。基本的信頼の上に立って初めて、ひとは、不安を覚えつつも、新たな世界に飛び込むことができるようになるからです。②メルヒエンの残酷さは、メルヒエン独自の極端性という様式の結果であり、この様式化のために写実性は失われ、「一種のゲームのルール」(三三四頁)となっています。たしかにメルヒエンは残酷であるかのようにみえても、そこにサディズムはありません。教育の面では、子どもの発達段階にしたがってその影響が異なることを考慮しなければなりません。子どもはまだ、悪を憎みつつ、悪人を愛することができるほどに成熟していないからです。ただし「メルヒエンの主人公の攻撃性は、本質的に怪物である竜に向け

られて」(二三三八頁) いることを忘れてはなりません。ここでは、残念ながら、この「竜」(悪)に関わる問題はこれ以上展開されていません。しかし筆者の考えでは、この解釈・評価は人間理解の根本に関わる重要な問題です。③「メルヒエンの王子と王女は、それが現実にはいなくなっても、いないがゆえに、特別なシンボルとしての力をもっている」(二三三頁)。これが、「メルヒエンは抑圧的か?」という問いに対するひとつの答えです。王や王子がメルヒエンにふさわしいのは、彼らが極端な人物であり、美の代表者として機能し、事柄の普遍主義的性質を象徴しているからです。④ 戦争が起こることはメルヒエンにとって自明なことです。白兵戦の様子が描かれることはありません。それは、多くの場合、話の筋を展開する機能を果しているにすぎません。戦争は「葛藤全般、闘い全般の具体化」であり、「含世界性のメルヒエン」にとって不可欠なものです。それに対して「反乱と革命は、比較的特殊な現象」(三四四頁) になっています。したがって「メルヒエンの主たる作用は、いかなる意味でも社会政治的作用ではなくて、一種の精神衛生的、あるいはまた精神療法的作用」(三四五頁) です。⑤「メルヒエンは、イニシエーション体験をファンタジーのレベルに移調している」とのミルチャ・エリアーデの見解を肯定的に受けとめ、リュティは「これは、メルヒエンの根源のことをいっているばかりでなく、メルヒエンの今日における作用

をもいつている」(三五〇頁) と解釈しています。彼はさらにこれとの関連で、メルヒエンのなかに心の表現を読みとるユング派の解釈とその魅力に触れながらも、メルヒエンにとって善悪の区別ないし評価は本質的なものであることを指摘しています。ただし、その内容は必ずしも厳密に確定されているわけではありません。つまりメルヒエンは美や善の厳密な定義を志向していません。⑥メルヒエンは、竜や魔女、人食いを処罰の対象とみなしてきます。ところが「主人公への対立者は、話のすじの動かし手」(三五九頁) であり、物語は、この対立者の思惑を越えて、最終的には主人公にとって望ましい形に終ります。つまり「メルヒエンにおける悪、それは物語的にいえば、すじの酵素であり、人間学的にいえば可能性の発展、展開、現実化のための酵素である。すなわち、弁悪魔論と弁神論がひとつになったものである。われわれはこのように、メルヒエンのすじという枠のなかでの悪を、物語技術的にも人間学的にも、意味の深いものと考える」(三六〇頁)。この意味で、「メルヒエンはまさに予防心理学と教育学であるが、それは部分的でしかなく、全体としては人間存在と人間の可能性の鏡なのである」(三六二頁)。この先に起こるのが、歴史相対主義の問題であり、それはさらに宗教との関わりという問題に通じるのですが、ここではその議論はまったく予想されていません。ところがリュティは、別の箇所でもキリスト教について言

及しているので、最後にその内容を紹介しておきます。

ヨーロッパのメルヒエンの本質を理解する上で、避けて通れない重要な問題のひとつが、このキリスト教との関わりです。前述の如く、リュティは、「メルヒエンの主人公」の項で「人間は救済を待ち望んでいる」(三二四頁)存在であると語り、さらに「ここにいたって、メルヒエンは、宗教的感情の近くに立っていることが分かる」(三一四頁以下)と述べています。そしてこの箇所が付された注(37)に、「キリスト教の影響」と題する記述が残されています。今回は、その内容に関する議論に入る余裕はありませんが、興味深い記述ですので、そのまま引用しておきます。是非読んでみてください。

「キリスト教の影響」

「魔法メルヒエンは、外面的にはキリスト教的なものをあまりもっていない。免罪と恩寵はほとんど役目をもっていない。キリスト教の人物や制度も同じである。富と権力は決して軽んじられておらず、努力の目標になっている。終局的目標は超越的なしあわせではなく、この世的しあわせである。魔法が好まれている。援助は神からくることは稀で、いつも素姓の知れない力による。というわけで、口伝えのメルヒエンはキリスト教会の産物でない

ことはたしかである。だが、メルヒエンは、多くのキリスト教的考え、一般的に宗教的考えには近い。つまり、人間は援助を必要としているし、救済を必要としている。仮象と実像が分離している。あるものが反対側へうつてかわる。最後のものが最初のものとなる。身分の低いものが高められる。わが身を犠牲にする用意のある者は、そのことによって勝利をおさめる。苦しみをわが身に負う者は、自分と他人を救うことができる……。そればかりではない、抽象的に様式化するメルヒエンは、終結部の讚美のこゝとばで、富と王権や、王女との結婚を、物質的現実としてでなく、人生の完成のしるしとして示している——まさに「真の富」としてであって、現実の富としてではない。物質的なものや純粋に感覚的欲求の満足が最高ではない、という考えは、他のあらゆるものと同様、誤用されることがある。それゆえにこそ、そうした考えは本質的に人間的な考えであり、人間それ自体にとって固有な考えなのである」(三七二頁以下)。

残された課題

一 『ヨーロッパの昔話——その形式と本質——』は、いうまでもなく個々の昔話の分析を前提として著されていますが、今回は、その具体的な例を上げる余裕がありませんでした。例えば、『昔話の本質と解釈』(福音館書店、一九九六年——これは、『昔話

の本質』(一九七四年)と『昔話の解釈』(一九八二年)を合本にして改題したものは、個々の昔話を取り上げつつ、まず、昔話の本質を論じ、次に解釈の例を提示しています。初めてリュティの書物に触れるひとは、初めにこの書物を読み、次に『ヨーロッパの昔話——その形式と本質——』を通してその理論を確認し、さらに最初の書物に戻るのがよいかもしれません。実践と理論の循環を体験するなかで、リュティの見解に対する理解もより深まると期待されるからです。

二 リュティは、昔話の形式と本質を論ずる際に、常に「ヨーロッパの伝説」との対比を念頭に置きつつ話を進めているため、読者の側にも、十分な読書経験が求められます。これは当たり前なのことなのですが、現実には、『グリム童話』と『グリム伝説』を通読したうえで個別的研究に入る若者はほとんどいません。筆者が日本の若者に求めるのは、まずこの通読体験です。これは、やがて多様な解釈理論を理解し評価する際に、思わぬ力を発揮するからです。

三 昔話と伝説の提供する「人間像の違い」に関する議論において、「メルヒェンは子どもの心を信頼でみたすが、伝説は不安がらせる」(『昔話 その美学と人間像』三三三頁)ことから考えても、両者は相補的に理解されるべきであるとされています。つまり、「信頼」から「不安」へという順序が考えられています。

これに「一次元性」の問題、つまり厳密な意味での超越性の不在という問題を重ね合わせて考えるならば、一体どうなるでしょうか。リュティは「一次元性」から出発し、それから「二次元性」を体験すべきだと言っているだけなのでしょうか。そして「不安」や「二次元性」が行き過ぎたときには、再び「信頼」と「一次元性」に帰るべきだと主張しているのでしょうか。その場合、最初の一次元性の経験と、不安を経験した後の一次元性の経験は同質なのでしょうか。両者の関係に関するリュティの見解をさらに明らかにする必要があります。

「不安」が社会の病理となりつつある現在、求められているのは「基本的信頼」の回復です。その期待は、静かに起こりつつある「大人の童話あるいはファンタジー」への強い期待と重なるように思われます。この期待に対する真の答えは、一体、どこからやってくるのでしょうか。

四 「一次元性」と「二次元性」の問題は、否応なしに、昔話や伝説は宗教とどのような関係にあったのかという問いを引き起こします。特に、ヨーロッパの宗教史には、ヘブライズムとヘレニズムの相剋と習合という歴史があるため、「一次元性」と「二次元性」のもつ意味とその影響史をさらに丁寧に跡づける必要があります。聖書が重視されている社会のなかで、昔話と伝説はどのように位置づけられてきたのでしょうか。もともと大人の話で

あったものが子どもの話として位置づけられることにより、昔話は、次第に治外法権の権利を獲得していっただけなのででしょうか。

グリム兄弟は、ドイツ語を話す民族の口承伝承や歴史資料を収集するなかでこれら昔話や伝説に出会ったとき、言語学的興味や文学的興味を越えて、宗教の問題について深く考える機会はなかったのでしょうか。このように問うのは、彼らはたしかにプロテスタントのカルヴァン派の伝統のなかで育ち、それを大切に守りつつ生きることが知られているからです。

五 「抽象的様式」の説明の際に、「孤立性」が指摘され、さらに昔話の主人公は基本的に「個」として登場することも確認されました。これは、聞き手や読み手が、主人公と自分を同一視しやすくするための戦略にすぎなかったのでしょうか。この「個」の意味と、近代人が宗教改革の経験を通して知った「個」の意味は、どのような関係にあるのでしょうか。これは、これからの「大人のメルヒェン」を考える際に、十分検討しておかなければならない問題です。